

# 脇 方 橫 穴 群

一般国道160号灘浦トンネル

拡幅工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査

1989年6月

氷見市教育委員会

# 脇 方 横 穴 群

一般国道160号灘浦トンネル  
拡幅工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査

1989年6月  
氷見市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、平成元年度におこなった、富山県氷見市脇方字丑ヶ端所在の脇方横穴群の発掘調査報告である。
- 2 調査は、一般国道160号瀬浦トンネル拡幅工事に先立ち、建設省北陸地方建設局富山工事事務所の委託を受けて、氷見市教育委員会がおこなった。
- 3 調査事務局は、氷見市教育委員会社会教育課に置き、課長代理 鳴 勝彦・主任 余川一枝・主事 浦 勇仁が担当し、課長 渡邊憲一が統括した。
- 4 調査は、氷見市立博物館学芸員（社会教育課兼務）大野 究が担当した。また調査補助員として浦 勇仁の他に次の方々の参加を得た。小田木治太郎・山崎典子・春日真実（富山大学大学院人文科学研究科学生）、長谷川健一・清水孝之・越前慶祐・鬼井 聰（富山大学人文学部考古学研究室学生）。
- 5 出土した人骨については、森沢佐蔵氏（富山医科薬科大学医学部第1解剖学教室助教授）に鑑定していただいた。森沢氏にはご多忙の中、現地調査及び人骨の計測等をお願いした。記して感謝申し上げる。
- 6 本書の編集・執筆は、大野 究が担当した。なお第4章については、森沢佐蔵氏から玉稿を賜った。
- 7 出土遺物は、氷見市立博物館が保管している。
- 8 調査及び本書の作成にあたって、以下の方々や機関から協力・指導を受けた。記して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。  
淡 晨（氷見市文化財審議委員・日本考古学協会員）、齊藤道保（日本考古学協会員）、秋山進午（富山大学人文学部教授）、宇野隆夫（富山大学人文学部助教授）、鈴木瑞治（氷見市立博物館長）、小境卓治（氷見市立博物館主任学芸員）、清水宣英（脇方今藏神社宮司）、谷野秀雄（地元）、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センター、氷見市立瀬浦中学校、氷見警察署、建設省富山工事事務所、建設省高岡国道出張所、柳熊谷組、泉組

## 目 次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 遺跡の環境 .....	2
第1節 遺跡の地理的環境 .....	2
第2節 遺跡の歴史的環境 .....	2
第3章 調査の成果 .....	31
第1節 これまでの調査 .....	31
第2節 調査の概要 .....	33
第3節 第3号横穴 .....	34
第4節 第4号横穴 .....	35
第5節 第8号横穴 .....	36
第4章 富山県水見市脇方横穴群出土人骨について .....	45
はじめに .....	45
1. 第3号横穴出土人骨 .....	45
2. 第4号横穴出土人骨 .....	46
3. 第8号横穴上層出土人骨 .....	47
4. 第8号横穴下層出土人骨 .....	53
おわりに .....	57
第5章 まとめ .....	60
第1節 脇方横穴群発掘調査のまとめ .....	60
第2節 脇方横穴群の推移 .....	61
第3節 水見地域の古墳時代から古代前半期の様相 .....	63
おわりに .....	73

## 図版目次

図版1	遺跡遺景・第3号横穴・第4号横穴・第8号横穴	第11図	周辺の遺跡(9) .....	13	
図版2	第8号横穴出土の状況・調査風景	第12図	周辺の遺跡(10) .....	14	
図版3	出土遺物 土器・銅錢	第13図	周辺の遺跡(11) .....	15	
図版4	出土遺物 人骨(1)	第14図	周辺の遺跡(12) .....	16	
図版5	出土遺物 人骨(2)	第15図	周辺の遺跡(13) .....	17	
図版6	出土遺物 人骨(3)	第16図	周辺の遺跡(14) .....	18	
図版7	出土遺物 人骨(4)	第17図	周辺の遺跡(15) .....	19	
図版8	出土遺物 人骨(5)	第18図	周辺の遺跡(16) .....	20	
図版9	出土遺物 人骨(6)	第19図	周辺の遺跡(17) .....	21	
図版10	出土遺物 人骨(7)	第20図	周辺の遺跡(18) .....	22	
図版11	出土遺物 人骨(8)	第21図	周辺の遺跡(19) .....	23	
図版12	出土遺物 人骨(9)	第22図	脇方横穴群の過去の出土遺物 .....	31	
図版13	出土遺物 人骨(10)	第23図	調査横穴の位置 .....	32	
図版14	出土遺物 人骨(11)	第24図	水見警察署の立合い .....	33	
図版15	出土遺物 人骨(12)	第25図	富山医薬大森沢助教授の調査 .....	33	
図版16	出土遺物 人骨(13)	第26図	第3号横穴実測図 .....	34	
図版17	出土遺物 人骨(14)	第27図	第4号横穴実測図 .....	35	
図版18	出土遺物 人骨(15)	第28図	第8号横穴実測図 .....	37	
図版19	出土遺物 人骨(16)	第29図	第8号横穴出土土器実測図 .....	38	
図版20	出土遺物 人骨(17)	第30図	第8号横穴出土物出土状態実測図(1) .....	39	
		第31図	第8号横穴出土物出土状態実測図(2) .....	41	
		第32図	第8号横穴出土物出土状態実測図(3) .....	43	
		第33図	第8号横穴出土物出土状態実測図(4) .....	44	
		第34図	第8号横穴上層の人骨(1) .....	50	
		第35図	第8号横穴上層の人骨(2) .....	51	
		第36図	第8号横穴下層の人骨 .....	54	
第1図	遺跡の位置 .....	1	第37図	脇方横穴群各横穴の構造 .....	62
第2図	遺跡周辺の地質断面図 .....	3	第38図	水系ごとにみた水見地城古墳時代から	
第3図	周辺の遺跡(1) .....	5			
第4図	周辺の遺跡(2) .....	6			
第5図	周辺の遺跡(3) .....	7			
第6図	周辺の遺跡(4) .....	8			
第7図	周辺の遺跡(5) .....	9			
第8図	周辺の遺跡(6) .....	10	第1表	水見市内の遺跡 .....	24
第9図	周辺の遺跡(7) .....	11	第2表	出土銅錢一覧 .....	38
第10図	周辺の遺跡(8) .....	12	第3表	水見市内所在古墳 .....	64

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置 .....	1	第36図	第8号横穴下層の人骨 .....	54
第2図	遺跡周辺の地質断面図 .....	3	第37図	脇方横穴群各横穴の構造 .....	62
第3図	周辺の遺跡(1) .....	5	第38図	水系ごとにみた水見地城古墳時代から	
第4図	周辺の遺跡(2) .....	6			
第5図	周辺の遺跡(3) .....	7			
第6図	周辺の遺跡(4) .....	8			
第7図	周辺の遺跡(5) .....	9			
第8図	周辺の遺跡(6) .....	10	第1表	水見市内の遺跡 .....	24
第9図	周辺の遺跡(7) .....	11	第2表	出土銅錢一覧 .....	38
第10図	周辺の遺跡(8) .....	12	第3表	水見市内所在古墳 .....	64

## 表目次

第1章 調査に至る経緯

海岸線を沿うようにして氷見市を南北に縱断する、一般国道160号は、氷見市にとって主要な生活道路のひとつであると共に、産業・観光道路としても重要な位置を占める大動脈である。特に海岸線北半の灘浦地区は、断崖が海岸に迫り出す地形であり、道路が整備されるまでは交通の難所であった。

瀬浦トンネルは昭和33年10月の国道改修に際し着工され、翌年に完成している。トンネルは延長126m、幅員5.5mであるが、旧道路構造令によって築かれているため、歩道が設置されおらず、またカーブもきつく見通しが悪いため、早急な改修が望まれていた。そこで昭和62年度に建設省は、瀬浦トンネル拡幅の計画書を発表し、翌年秋から工事に着手することが決定した。

トンネルの基方側には、周知の遺跡である脇方横穴群が所在しており、工事によりその一部が破壊される恐れがあった。そこで市教育委員会では昭和62年秋に建設省と協議をおこない、(1)覆土のため横穴の規模が不明である。(2)工事の影響により横穴内で落盤の危険がある。(3)工事の途中で設計変更の可能性がある。ということから、トンネルに接近している3基の横穴を事前調査して、記録保存することになった。



第1図 遺跡の位置

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の地理的環境（第2図参照）

氷見市は富山県の北西部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。市域は、市の南西方面にそびえる標高637mの宝達山を起点として、北東方向にのびる宝達丘陵と、東方向にのびる二上丘陵の、二つの丘陵にとり囲まれた一帯である。宝達丘陵は、氷見市と石川県との境界線をなしながら石動山に至り、これより石動山丘陵となって崎山半島を走り、海岸線に連している。一方二上丘陵は、氷見市と西砺波郡福岡町・高岡市との境界線をなして、次第に低くなりながら海老坂峠に達し、ここからは標高が高くなり、二上山ブロックとなり、その先端は海岸に急斜している。氷見市は、これらの丘陵から派出する小丘陵により、西条・十三谷・上庄谷・余川谷・八代谷・灘浦の6つの地域に分けられている。また市の東側は富山湾に面し、約20kmの海岸線の北半分は断崖、南半分は砂丘である。

灘浦海岸は露岩状況が良好であり、海平面から20~25mの急崖からなる海蝕崖がほぼ連続すると共に、その上方部に平坦地が分布している。この平坦地形は海蝕による侵食と考えられ、被覆部はほとんど存在せず、表土下にはすぐ風化岩が分布している。

遺跡周辺に分布する地質は、新第3紀鮮新世氷見累層蘇田シルト岩層であり、東~南東方向に10°程度の緩い傾斜となっている。横穴群はこのシルト岩層のうちの、主に硬質砂岩シルト岩層に築かれている。

横穴群の所在する丘陵は、標高48.7mの地点を最高に海岸に急斜しており、その上面は山林・畑地として利用されている。またその最高地点近くに今藏神社が、海岸に突き出た地点に同社摂社魚取社が鎮座している。さらに横穴群の南西部には宇波川が流れ、その河口付近に現在の宇波・脇方集落が所在しており、河口左岸には宇波漁港が立地している。宇波・脇方は古くからの氷見の漁業の拠点のひとつである。

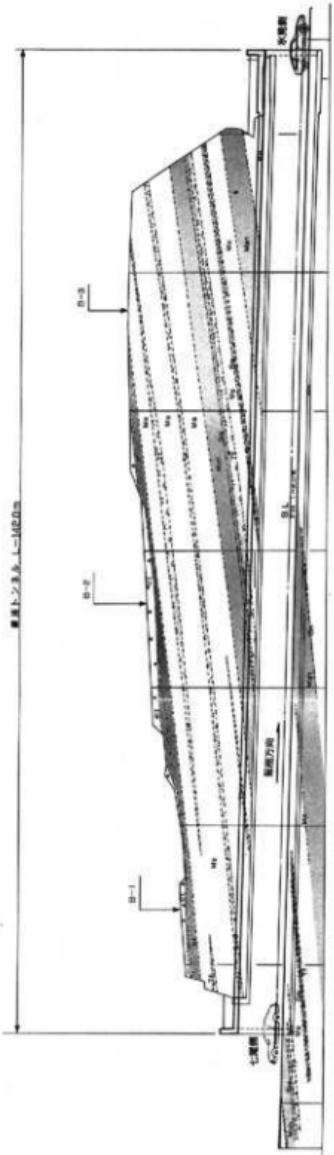
一方、丘陵の北側は小境集落にあたり、小境側の丘陵先端には朝日神社が鎮座する。この社叢はタブノキを中心とした黒葉樹林であり、県の天然記念物に指定されている。小境周辺の沿岸には小規模ながらも砂浜がみられ、夏場は海水浴場となっている。

### 第2節 遺跡の歴史的環境（第3~21図・第1表参照）

これは氷見市全体にいえることであるが、発掘調査例が少なく、系統だった分布調査もおこなっていない現状では、歴史的環境の把握は非常に断片的なものであるといわざるをえない。市立博物館・市教育委員会では昭和58年に遺跡地図を発行しているが、これも開発行為により偶然周知した遺跡を中心に、編集せざるを得なかったものである。第3~21図はこの遺跡地図にその後周知した遺跡を加えて作成したものである。以下灘浦地域を中心に記述していく。

縄文時代：宇波川河口から約2km南の海岸近くに泊洞穴遺跡（9）がある。昭和42年に瀧長・林・大門両氏が人骨の頭部と肋骨の一部を採集し、この人骨は小片 保氏らが形態学的比

地質時代	地質名	地質記号	記事
第四紀 完新世	砂岩 シルト岩	△ d t △ M s	緩斜面、谷筋に分布。砂岩シルト及び、砂岩、シルト岩の角砾からなる。未固結でルーズ。
新鮮 新世	水見鱗層軟田 硬質砂岩	M s h	調査地の基盤を構成する。細砂分を含むシルト岩で、無層理・塊状。軟岩状で、指圧で容易に鉛りける。
第三紀 代 紀	シルト岩層 細粒砂岩	s f	M s 中に鉛り硬質で指圧では砕けにくい。
	中粒砂岩	s m	M s 中に鉛りする。層厚1~1.5m。硬質・緻密な細粒砂岩で、ハンマーの打撃で硬質音を発する。
	凝灰岩	T f	M s 中に鉛りする。層厚20~40cm。中粒の均質な砂岩で、風化進み軟質。財圧で容易に鉛る。



第2図 運跡周辺の地質断面図（灌漑トンネル坑幅工事バンフレットから転載）

較分析により縄文時代早・前期のものと推定している。一方松浦秀治氏は理化学検査により高いフッ素含量値を検出し、更新世末期にまで遡る可能性を指摘している。

確実な縄文時代の遺跡としては、中期～晚期の大境洞窟遺跡（5）がある。大正7年に東京帝国大学人類学教室が中心となって発掘調査をおこない、県内で初めての学術調査、また日本で初めて発掘された洞窟遺跡として著名である。確認された6層の地層のうち、最下層（第6層）から縄文中期中葉～後期前葉の、第5層から縄文晚期後葉の遺物が出土している。この他の遺跡としては、海岸部に中波貝塚（1）・虻ヶ島遺跡（3）・萩田遺跡（114）、丘陵部に長坂貴船遺跡（10）・桜鉢神社遺跡（111）がある。

弥生時代：前述の大境洞窟遺跡第5層から中期初頭、第4層から後期～終末期の遺物が出土している。また萩田遺跡からも終末期の土器が出土している。

古墳時代：灘浦地域の古墳では宇波古墳（8）が古くから知られている。明治33年に人骨1体分・鉄刀・須恵器が出土しており、6世紀中～後葉と推定している。この他の古墳としては脇方十三塚古墳群（135）・慾野神社古墳群（112）がある。集落と推定できるのは前述の萩田遺跡であり、TK-47に比定できる須恵器が出土している。また九殿浜遺跡は6世紀末～7世紀初めの製塩遺跡であり、同様の製塩土器は大境洞窟・萩田遺跡からも出土している。横穴は脇方横穴群（6）の他に、萩田薬師横穴群（144）・阿尾瀬戸ケ谷内横穴群（22）がある。

古代：萩田遺跡から8世紀～9世紀初めの須恵器が出土している。

中世：灘浦地域の中世の遺跡で、数多く確認されているのは墓地である。このうち長坂ソウト遺跡（126）・脇中世墓群（124）・戸津宮中世墓群（217）は珠洲陶器を鹿骨器に使用している。また萩田薬師中世墓では、古墳時代の横穴を改変して石造物・土師器・銅鏡・火葬骨を納めている。この他にも中世と推測する石造物が数多く残っている。当地域でこのように中世の遺跡が多い理由のひとつとして、背後にそびえる石動山の影響が考えられる。

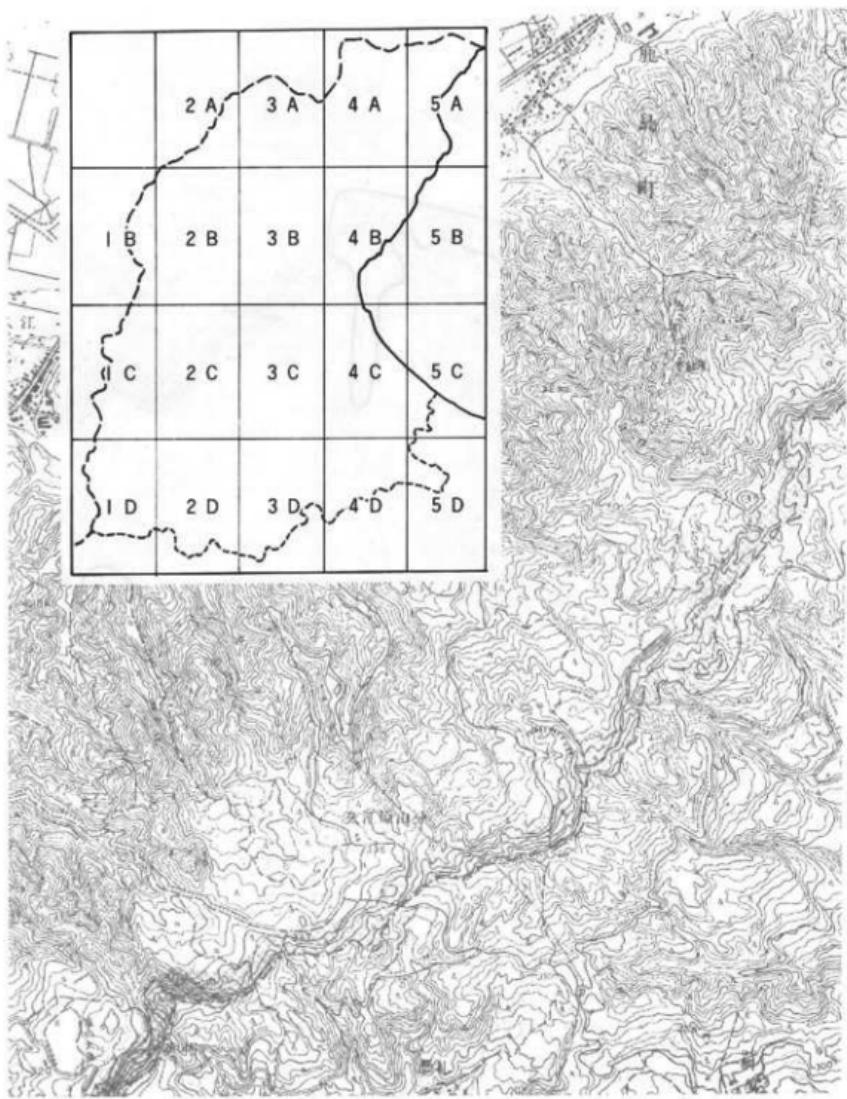
近世に比定できる考古資料は今のところない。

このように灘浦地域は水見市の他の地域と比較して、周知の遺跡が非常に少ない。これはこの地域における開発行為が今まで少なかったためと受け取れよう。しかし萩田地区背後の丘陵にゴルフ場の建設が進められているように、海岸部を中心に今後開発が増加していくと推測できる。水見市の他の地域とともに詳細な分布調査による遺跡の把握と、その保護対策が急務になっている。

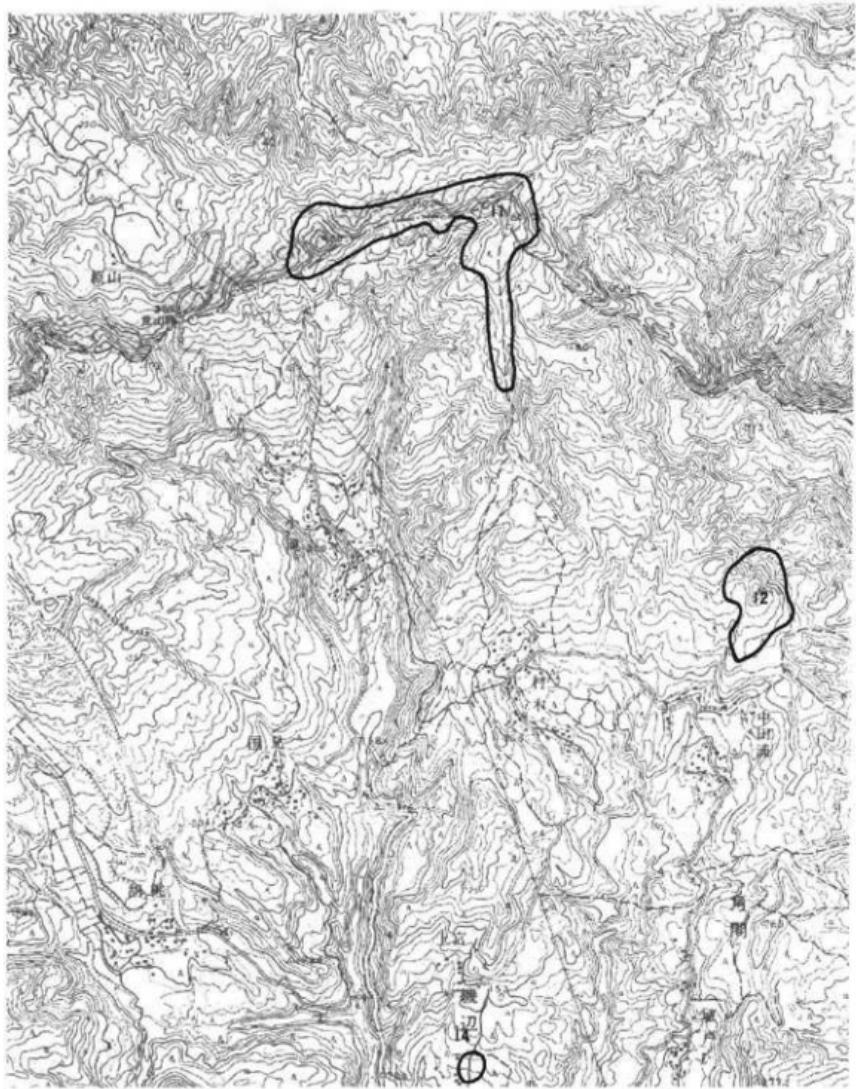
註1：岸本雅敏 1983 「富山県における土器製塩の成立と展開」『北陸の考古学』石川考古学研究会

註2：水見市教育委員会 1984 「富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書」

水見市立博物館 1985 「水見の石造美術—石動山山麓を中心として—」



第3図 周辺の遺跡(1) 2A



第4図 周辺の遺跡（2） 3 A



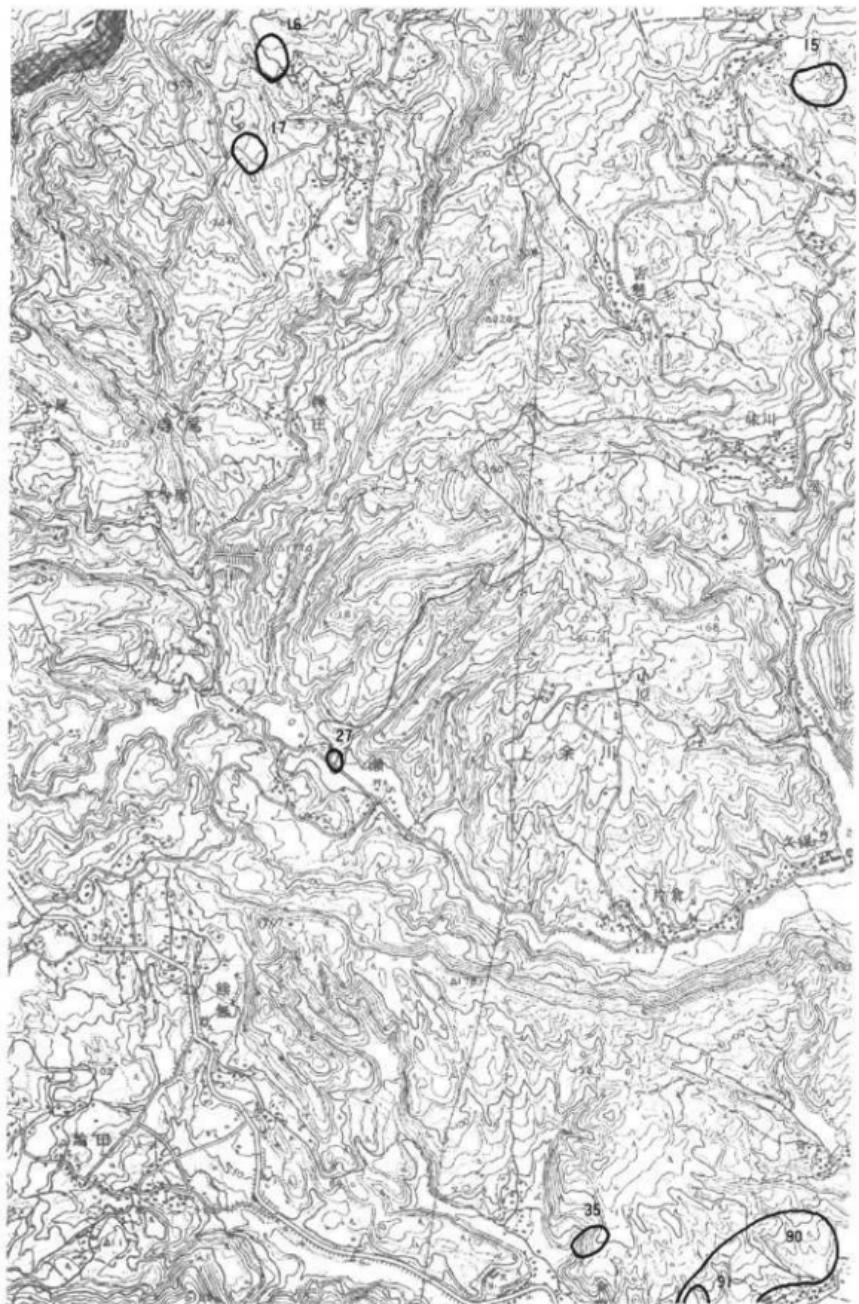
第5図 周辺の遺跡（3） 4 A



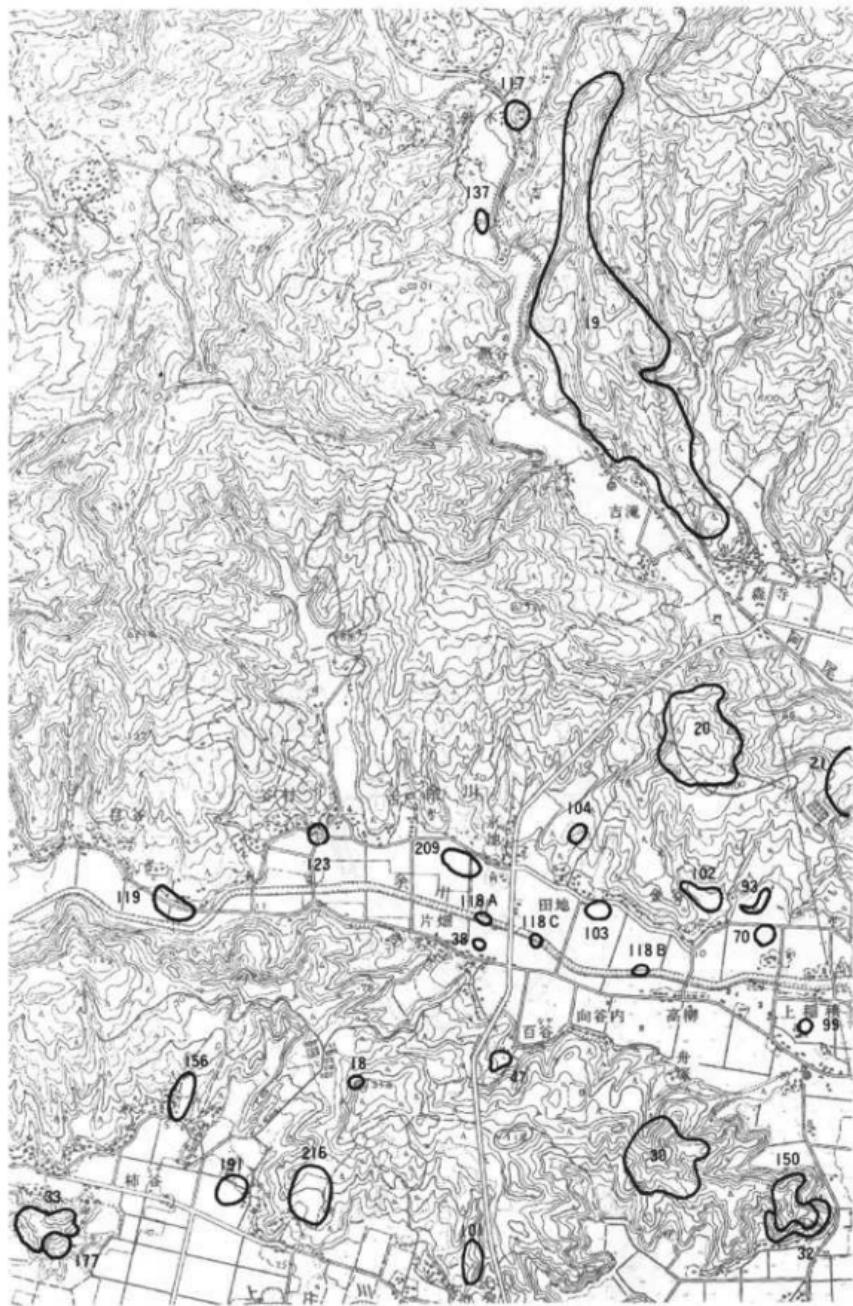
第6図 周辺の遺跡 (4) 5 A



第7図 周辺の遺跡（5） 18



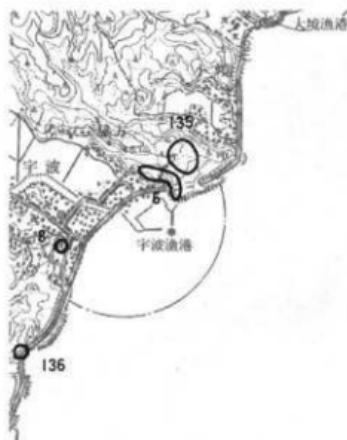
第8図 周辺の遺跡（6） 2B



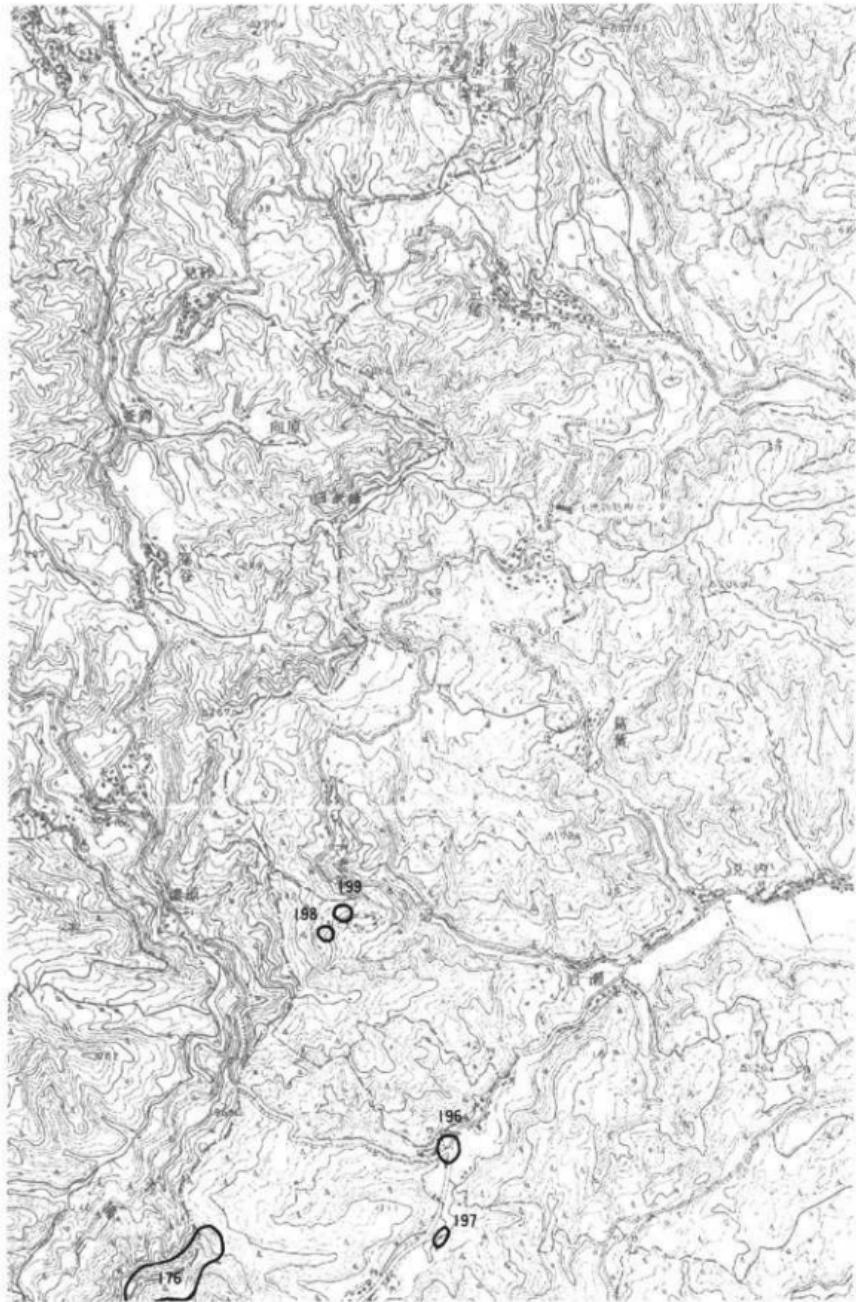
第9図 周辺の遺跡(7) 3B



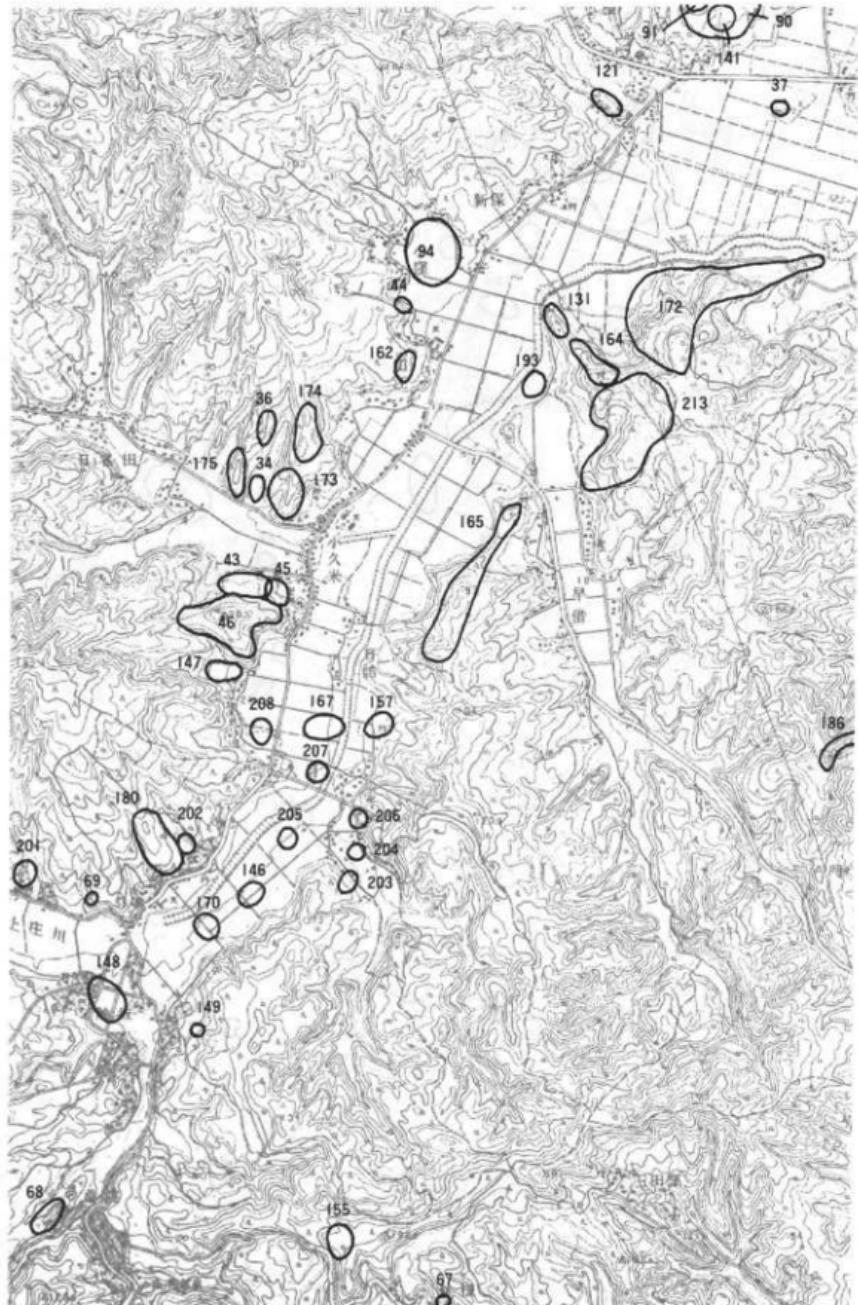
第10図 周辺の遺跡 (8) 4B



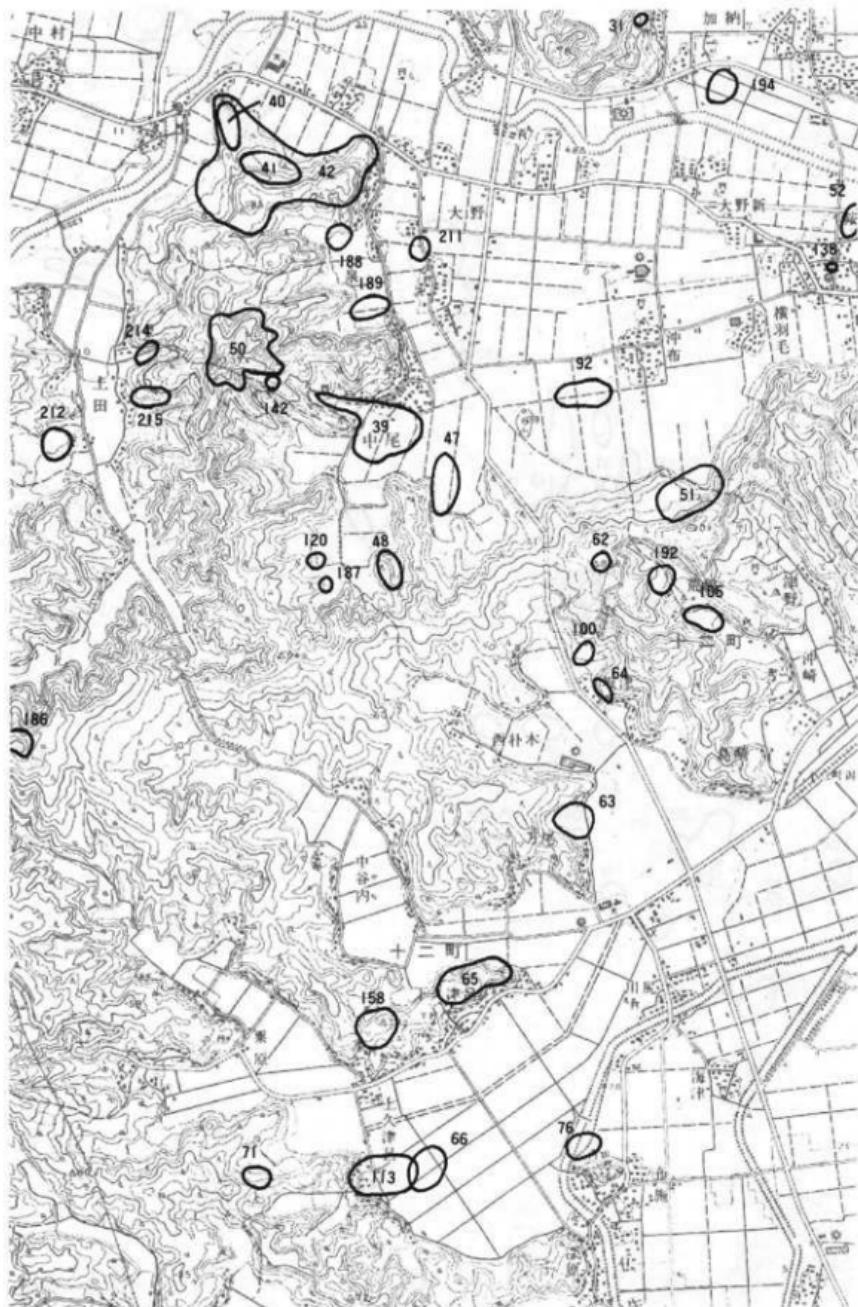
富山湾



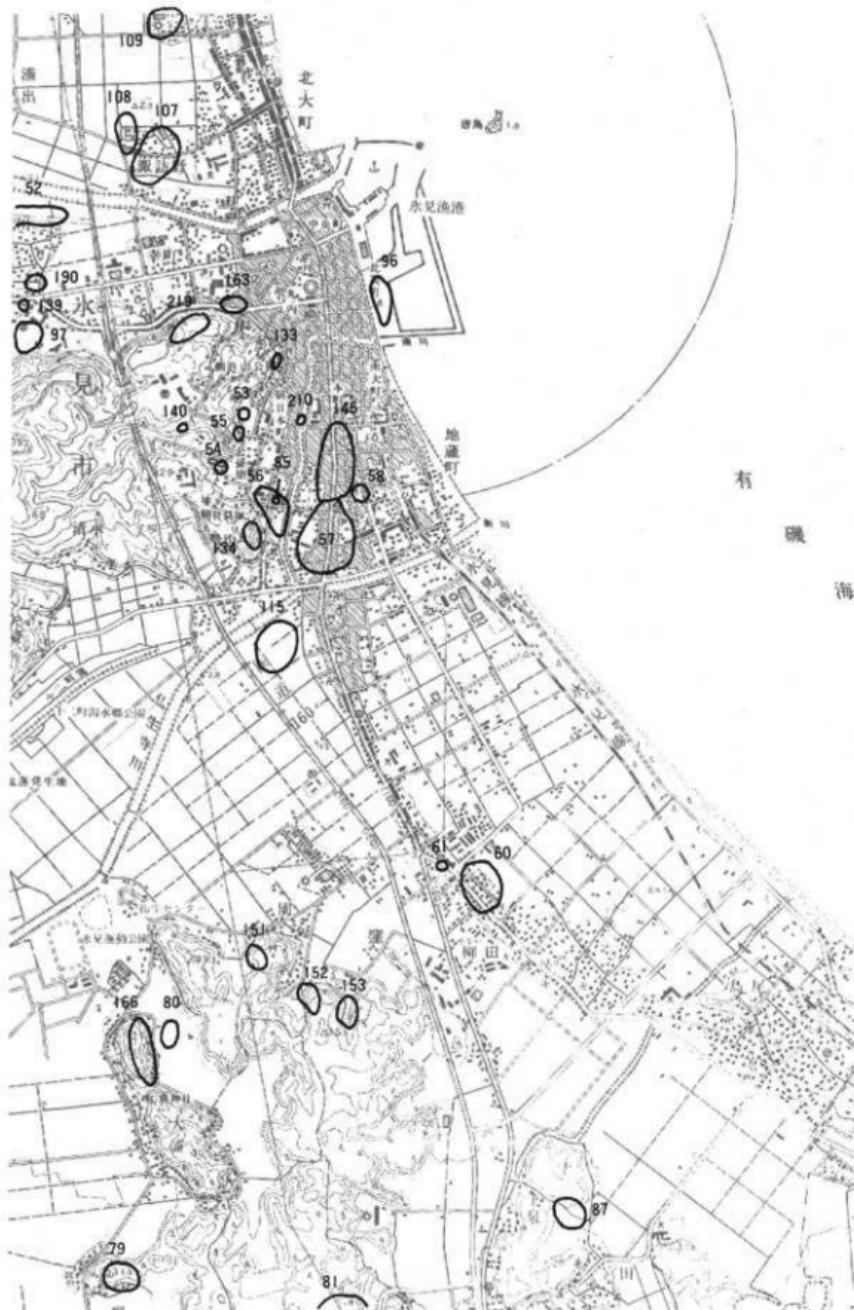
第12図 周辺の遺跡 (10) I C



第13図 周辺の遺跡 (II) 2 C



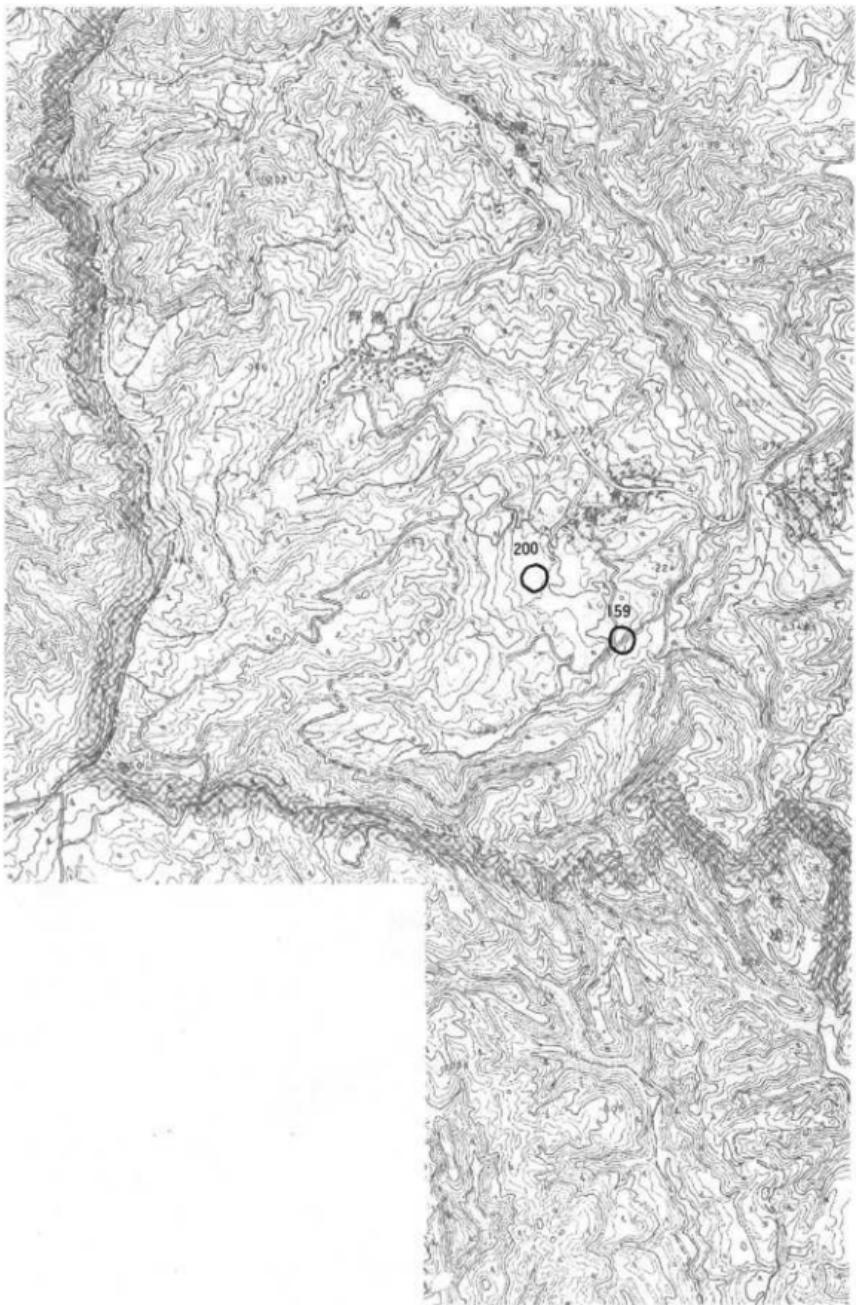
第14図 周辺の遺跡 (12) 3C



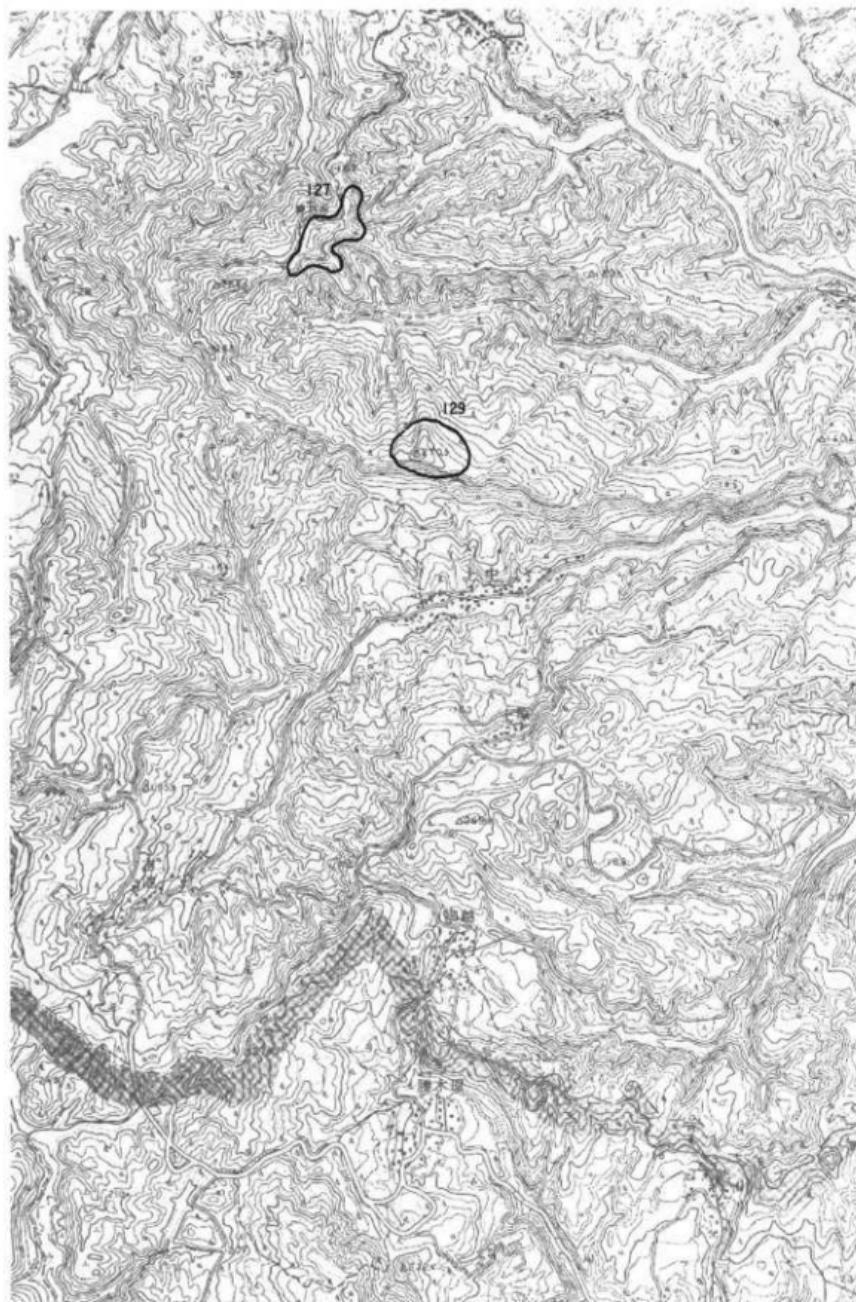
第15図 周辺の遺跡 (13) 4 C



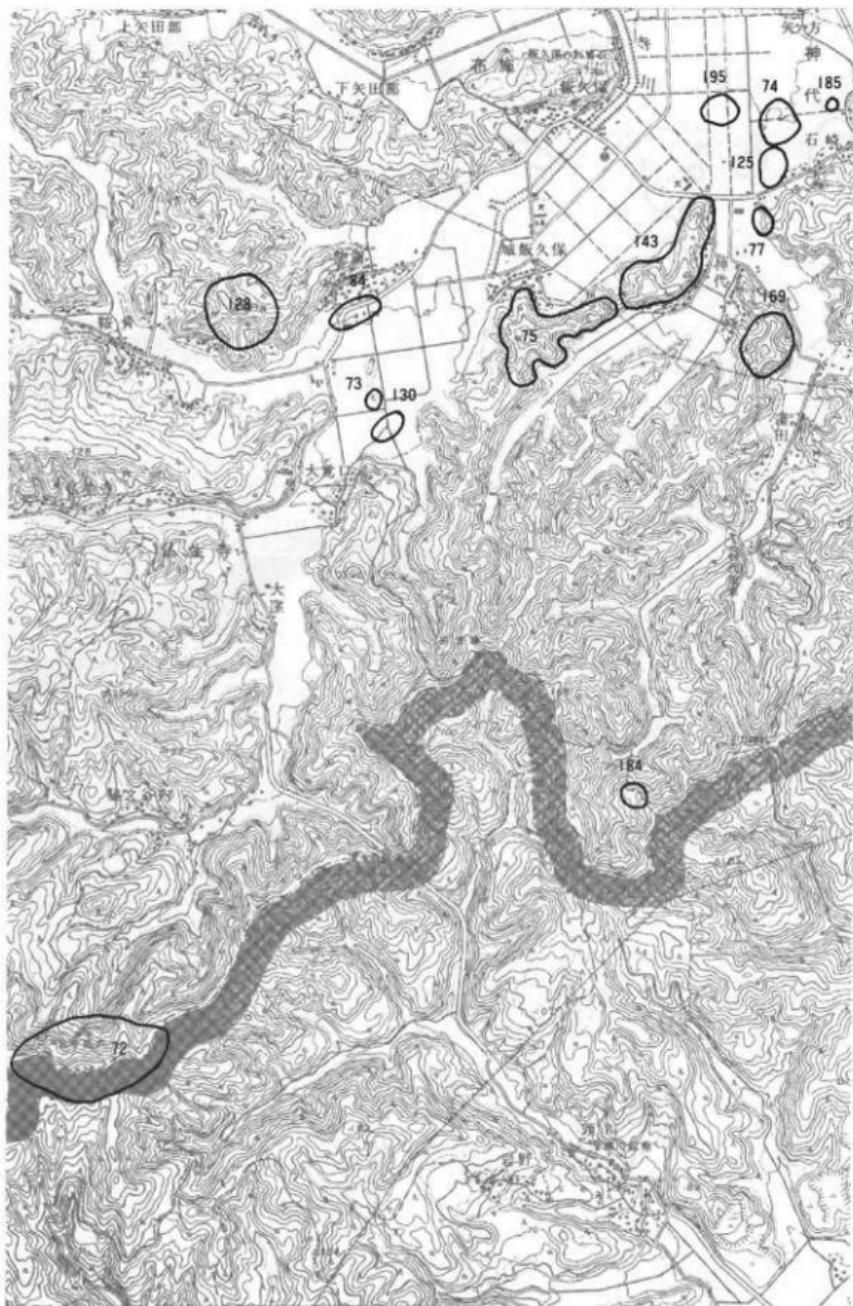
第16図 周辺の遺跡 (14) 5 C



第17図 周辺の遺跡 (15) I.D



第18図 周辺の遺跡 (16) 2D



第19図 周辺の遺跡 (I7) 3 D



第20図 周辺の遺跡 (18) 4 D



第21図 周辺の遺跡 (19) 5 D

第一表 氷見市内の遺跡

登録番号	地図番号	遺跡名	所在地	時代	主な出土遺物	備考	主な文献	県番号
1	5 A	中波貝塚(女良貝塚)	中波455	縄文中期		ほぼ消滅	32. 49	1
2	5 A	一ノ夜城	中田宿町	滑石製義齒		44	2	
3	5 A	蛇が島	姿字浜898	縄文後期		49	3	
4	5 A	九殿浜	姿字九殿	古墳・奈良・平安	須恵器・土師器・製塗土器	ほぼ消滅	49. 58	4
5	5 A	大境洞窟	大境字駒首	縄文中期～中世	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・中世陶器・人骨・石骨・石拂・骨角器		2-11. 15. 17. 24. 28. 32. 35. 40. 47. 49. 56	5
6	5 B	脇方横穴群	脇方字丑が端	古墳	直刀・須恵器・管玉・切子玉・人骨	8基以上	31. 39. 43. 47. 58	6
7	4 B	宇波庚申塚	宇波			ほぼ消滅		7
8	5 B	宇波古墳	宇波神社境内	古墳	人骨・全体分・直刀・提瓶・鉈	ほぼ消滅 石室石棺神社境内有	1. 43. 47	8
9	4 A	泊瀬	小杉	縄文早～前期	人骨・土器片		69. 84. 96	9
10	4 A	長坂貴船	長坂字前田	縄文中～後期	縄文土器・石鐵・石斧	一部現状保存	49. 72	10
11	3 A	荒山	岩字奥山割	宝町			44. 78	11
12	3 A	尾崎城(尾花城)	村木			伝承地	44	12
13	4 A	白河城	白川字出崎出	室町			44	13
14	3 A	磯部明円	磯辺北山1553～57	縄文	縄文土器・石器		47	14
15	2 B	一ノ削前田	一削字前田2362	縄文中～後期	縄文土器・石鐵・石斧・块状耳飾		39. 47	15
16	2 B	懸札上ノ前	懸札字上ノ前767	縄文中期	縄文土器		47	16
17	2 B	懸札宮	谷内懸札宮が谷625	縄文後～晚期	縄文土器・石鐵・石斧		47	17
18	3 B	高塚	余川字片矩			城址伝承地	44	18
19	3 B	森寺城(湯山城)	森寺城山	室町		S 48. 1. 30市指定	44. 61	19
20	3 B	海老瀬城(月夜城)	金町字瀬・月夜瀬	宝町			44	20
21	3. 4 B	指崎向山古墳群	指崎字向山30他	古墳	13号墳出土遺物 直刀・管玉	13基以上 S 24. 群中の1基(13号) 発掘調査、木棺、櫛床	29. 47	21
22	4 B	阿尾瀬戸	阿尾瀬戸が谷内塗穴	古墳	人骨	消滅か?	47	22
23	4 B	阿尾	阿尾543～4	古墳初期	土師器		20. 47. 49	23
24	4 B	阿尾城山	阿尾城山6群	古墳	提瓶・鉈・金環・刀子	4基以上	31. 47	24
25	4 B	阿尾	阿尾字城山	室町	珠圓鏡・土師器など	S 40. 10. 1市指定	22. 27. 44. 65	25
26	4 B	三角山城	阿尾字島尾				44. 102	26
27	2 B	一ノ瀬	一ノ瀬堀	縄文後期	縄文土器・石斧	ほぼ消滅	39. 47. 67	27
28	4 B	稻積三ツ屋前	稻積三ツ屋前	奈良・平安				
29	4 B	城	城			城址伝承地	44	
30	3 B	木谷	木谷				44	30
31	3 C	加納中程塚	加納字中程					31
32	3 B	加納横穴群	加納字蛭子	古墳	須恵器・杯・提瓶・高杯・鉈・台付長頸壺・横瓶・刀子・金環・勾玉・切子玉・管玉・小玉・人骨	56基以上 群中4基が発掘調査(S 24. 29) S 48. 3. 10市指定	12. 31. 37. 48. 51. 52. 63. 76	32
33	3 B	中村城	中村字栗屋山	室町			44	33
34	2 C	小久米番場谷内	小久米字番場谷内	奈良・平安・江戸	須恵器・土師質骨董	消滅		
35	2 B	谷屋	A谷屋	奈良・平安				35
36	2 C	小久米B	小久米			詳細不明		
37	2 C	中村天塙山	中村字天塙山	古墳				
38	3 B	余川片	余川字片湖	古墳	須恵器		100	
39	3 C	泉中略	寺泉字寺尾		金銅仏		97	39

40	3 C	領 毛	A	泉字領毛	縄文～古墳	石器、須恵器、土師器					
41	3 C	領 毛	B	泉字領毛	古墳	須恵器、土師器					
42	3 C	泉 古 墳 群		泉字領毛	古墳	須恵器、直刀、玉類	20基以上 群中3基(鶴塚・鶴塚・備塚)が大正年 間に発掘されてい る。	47	40 41 42		
43	2 C	小 久 米	A	小久米字跡跡平	縄文～奈良・平安			77. 82			
44	2 C	小 陶 瓦 窯	A	小窯	奈良	平瓦、丸瓦?	小臨庵寺出土品と 同質、同型	38. 88	44		
45	2 C	小久米 A 古墳群		小久米	古墳		2基以上	77			
46	2 C	小瀬城(池田城)		小久米字跡田	室町			44.101.103			
47	3 B	余川寺ヶ谷内		余川字寺ヶ谷内	古墳～室町	須恵器、土師器、珠洲鏡		60. 100			
48	3 C	中 尾 橫 穴 部		中尾字寺尾	古墳				48		
49	3 C	中尾新保谷内		中尾字寺尾	奈良・平安				49		
50	3 C	千 久 里 城		中尾字戸戸					44. 103	50	
51	3 C	沖 布	A	沖布字引畠	弥生後期～奈良・平安	弥生土器、土師器、須恵器		37. 47	51		
52	3.4 C	鞍 川 金 谷		鞍川川下	縄文中期～古墳	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器		47. 67			
53	4 C	上 日 神 中世墓群		朝日本町16-8	镰倉初期～室町後期	鐵劍、鏡、袋、片口鋸		41	53		
54	4 C	朝 日 水 源 地		朝日丘	縄文後・晚期	縄文土器、石器		48	54		
55	4 C	朝 日 長 山 古 墳		朝日本町(長山)708	古墳(6世紀前葉)	須恵器、土師器、直 刀、鉄鋒、杏葉、冠 帽片、管玉、埴輪	消滅	36. 47 57. 79	55		
56	4 C	朝 日 貝 塚		朝日丘151～154	縄文前期～晚期	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、石斧、 石鎌、石棒・石器、 骨角器、人骨、象骨	大正11年国指定	13.14.15.18 21.23.25.30 33.34.40.47 49.70.80.81 87	56		
57	4 C	岩 上		伊勢大町、本町	縄文～中世	縄文土器、土師器、 須恵器、石器、石包 丁、土師質塔片		25. 70	57		
58	4 C	伊勢玉神社中世墓群		伊勢大町1丁目9	鍾乳、室町	珠洲鏡			58		
59	4 B	福 桧 三 里 野		宋町	奈良・平安～中世	須恵器、土師器、珠洲鏡	ほほ消滅				
60	4 C	柳 田		柳田2944他	弥生後期～古墳	弥生土器、土師器、須恵器		42. 47	60		
61	4 C	麻 疣 塚							61		
62	3 C	荒 館 A		十二町荒館			城郭伝承地		62		
63	3 C	万 尾		万尾字二俣目	弥生～古墳				63		
64	3 C	坂 津 橫 穴		十二町坂津字 新が谷内	古墳	須恵器、土師器、直刀、 金環、銀環、人骨	36基以上	1.31.47	64		
65	3 C	久 津 吕 城		下久津呂字城			伝承地	103	65		
66	3 C	上 久 津 吕 A		上久津呂字前田	古墳～奈良・平安	須恵器、土師器		50	66		
67	2 C	鉢 板 鋼 鉢					詳細不明		67		
68	2 C	桑 / 肥 吉 谷		桑 / 院字吉谷	縄文中期			47	68		
69	2 C	久 目 駒		久目					69		
70	3 B	福 桧 西 ケ 谷 内		福樺西ケ谷内	奈良・平安	須恵器、土師器		62.91.100			
71	3 C	上久津呂ゴンダ山		上久津呂ゴンダ山	縄文、古墳	石斧、土師器					
72	3 D	二 ツ 城		仏生寺字籠/谷内			伝承地		72		
73	3 D	惣 領 古 墳		惣領字紅地平1番地	古墳(6世紀後葉)	直刀、刀子、管玉、 須恵器		47	73		
74	3 D	神 代 羽 運		神代字羽連99	縄文～奈良・平安	石斧、土師器、須恵器		47	74		
75	3 D	惣 久 保 城		惣久保字向山	室町			44.103	75		
76	3 C	布 施 八 ケ 田		布施八ヶ田	縄文後期	縄文土器			76		
77	3 D	矢 / 久 一 丁 目		矢 / 久一丁目380	古墳初期	土師器	旧矢 / 久一丁田	47	77		
78	4 D	坂 田 大 久 前		坂田字大久前	古墳～奈良・平安	須恵器、土師器		66. 94	78		
79	4 C	馬 乘 山		坂田山 / 越2-5	古墳初期		詳細不明	94	79		
80	4 C	大 浦		大浦	弥生		詳細不明		80		

81	4CD	四 十 塚	下田子字四十冢1220	縄文～晚期 奈良・平安	縄文土器、石偶、石器、須恵器、土師器	消滅 53. 94	39. 47 81
82	4 D	多 胡 城	下田子字西十塚	奈良・平安	須恵器	消滅 94	94.103 82
83	4 D	田 子	下田子字瓦塚	奈良・平安	須恵器		94 83
84	3 D	惣 領	惣領	古墳～奈良・平安	須恵器、土師器、馬齒		
85	4 C	朝 日 十 字 路	朝日丘	中世	宗・明鏡等6,464枚		
86	4 D	堀 田 ワタリウエ	堀田字ワタリウエ	古墳～中世	須恵器、土師器、珠洲焼	旧堀田西谷内 94	
87	4 C	上 泉	上泉	古墳～中世	須恵器、珠洲焼		
88	4 B	阿 尾 島 田 A	阿尾字島田	古墳～中世	須恵器、土師器、珠洲焼、土師質土器		102
89	4 B	山 嶺 城	阿尾・鞍田				102
90	2BC	中 村 荘 屋 古 墳 群	中村字荘屋	古墳		6基以上	
91	2BC	谷 屋 B	谷屋	古墳	子持勾玉、疋		54
92	3 C	沖 布 B	沖布	奈良・平安	須恵器、土師器		
93	3 B	稻 橫 後 池	稻横字西谷内	縄文前期	縄文土器		100
94	2 C	小 雲 魔 寺	小雲寺塔のすま	奈良	平瓦、丸瓦、礎石		38. 89
95	4 A	八 代 仙 行 墓	角間字八代仙				78
96	4 C	比 美 川 池	浜・美美川			二次的散布地	
97	4 C	鞍 川 寺	鞍川字寺田	縄文後期	縄文土器	消滅	52
98	4 D	坂 田 カ マイ フ 依 古 墳	坂田字藤塚			中世墓か?	94
99	3 B	稻 橫 前 田	稻横字前田	古墳～平安	須恵器、土師器、管玉		62
100	3 C	坂 津	十二町坂津	平安・鎌倉	土師器、中世陶器		
101	3 B	七 分 一	七分一	古墳	須恵器、土師器		
102	3 B	余 川 親 ヶ 谷 内	余川字親ヶ谷内	奈良・平安	須恵器、土師器		60. 100
103	3 B	余 川 海 老 田	余川字松木	奈良・平安	須恵器、土師器		60. 100
104	3 B	余 川 古 墓 谷 内	余川字田地	中世	珠洲焼		60
105	4 B	指 岐 五 反 田	指岐字五反田	奈良・平安	須恵器、土師器		
106	3 C	荒 船	B十二町荒船	縄文・鍵倉	石斧、瓦器		
107	4 C	諏 訪 野 A	諏訪野	奈良・平安	須恵器、土師器		
108	4 C	諏 訪 野 B	諏訪野	中世	土師質土器		
109	4 C	加 納 金 宮	荣町		土師器		
110	4 B	阿 尾 島 田 B	阿尾字島田	中世	珠洲焼、土師質土器		
111	4 A	橋 神 社	白川	縄文後期	縄文土器、石斧、石器		
112	4 B	熊 野 神 社 古 墳 群	字波吉田567	古墳、中世		群中1基は中世墓?	
113	3 C	上 久 津 吕 B	上久津呂	奈良・平安	土師器		
114	4 B	数 田	数田竹子の越297.298	縄文～奈良・平安	縄文土器、須恵器、土師器		
115	4 C	十二町西排水機場	塚	縄文前期	縄文土器、石鏡、石錐		71.73.95
116	4 D	小 竹 摩 顶 山	小竹	室町	宗・明鏡等389枚		32
117	3 B	磯 远 神 社 中 世 墓	磯辺	中世	珠洲焼		
118	3 B	余 川 河 床	余川	縄文・古墳・古代	須恵器、縄文土器	A～C地点	60. 100
119	3 B	余 川 市 谷	余川市谷	古代			100
120	3 C	中 尾 ガ メ 山	中尾字芋戸	鍵倉	唐・宗鏡等1,794枚		75
121	2 C	新 保 城	新保城ケ峯				
122	4 B	八 代 城	北八代城ヶ峰			伝承地	
123	3 B	余 川 谷 村	余川谷村	古代			100
124	5 A	駒 中 世 墓 群	駒少彦名神社境内	中世	珠洲焼甕、石塔		
125	3 D	石 墓	堀田一の坪2,312塚	奈良・平安中世	須恵器、土師器、珠洲焼		64
126	4 A	長 板 ソ ウ ト	長坂字山田ソウト	中世	珠洲焼甕2.人骨2 宗鏡3枚、五輪塔		78
127	2 D	鶴林山(鶴骨山)城	鶴骨	室町			101.103
128	3 D	惣 領	惣領	室町			103
129	2 D	仏 生 寺 城 山	仏生寺上中				
130	3 D	惣 領	惣領	古墳～奈良・平安	須恵器、土師器		
131	2 C	新 保 橋 穴 群	新保字後山				19
132	4 B	指 岐 謙 訪 野	指岐字謙訪野	中世	土師質土器		
133	4 C	連 東 墓 中 世 墓 群	新日本町(庚申塚)	中世	珠洲焼、五輪塔、板碑		
134	4 C	朝 日 湾 山 古 墳 群	朝日丘(湖山)	古墳			

135	5 B	船方十三塚古墳群	船方・小境	古墳	土器器			
136	5 B	宇波 洞 窟	宇波一石山		土器片			
137	3 B	磯 辺 中世墓	磯辺	中世	珠洲焼			
138	3 C	鞍川 A 中世墓	鞍川	中世	珠洲焼			
139	4 C	鞍川 B 中世墓	鞍川	中世	珠洲焼			
140	4 C	棚 日 谷 内 横 穴	幸町	古墳			68	
141	2 C	谷 屋	C 谷屋	古代	須恵器			
142	3 C	竹 里 山 岩 屋	中尾	中世	石造不動明王像	魂摩理有り		
143	3 D	光西寺山古墳群	神代・巣久保	古墳			94	
144	4 B	蔽 田 菜 師	蔽田字菜師	古墳・中世	須恵器・鐵刀・土 器器・人骨・石造 物など	横穴と中世墓	83	
145	4 C	御 座 町	伊勢大町					
146	2 C	久 目 覚 地	久目覚地	古代	須恵器		101	
147	2 C	久 目 千 元	久目千元	古墳	土器器		101	
148	2 C	触 反 坂 広 潤	触坂広瀬	縄文・古墳・古代	縄文土器・土師器 ・須恵器	墨書き土器	59・101	
149	2 C	堂 谷 山 古 墳	触坂	古墳			59・101	
150	3 B	加納越子山古墳群	加納越子山	古墳			76	
151	4 C	圓 カン デ 露 跡	圓カンデ	古墳	須恵器		93	
152	4 C	圓 長 堤	圓		鐵滓			
153	4 C	柳 田 沖 宮	柳田沖宮		鐵滓			
154	4 D	堤 田 城 堀 田	中世				92・94・103	
155	2 C	桑 院 金 山 桑 院			鐵滓			
156	3 B	裕 谷 離 木 出	裕谷		鐵滓			
157	2 C	久 目 安 来 寺	久目安来寺	古代	須恵器		101	
158	3 C	上 久 津 宮 C	上久津呂	中世	珠洲			
159	1 D	土 倉 稲 村 土 倉		縄文	石器		101	
160	4 B	治 馬 当				塚		
161	4 B	宇 波 高 坂	宇波			炭焼窯か		
162	2 C	田 江 大 島	田江	縄文	縄文土器		90	
163	4 C	七 軒 町	幸町	縄文	縄文土器			
164	2 C	連川神社古墳群	早借・新保	古墳				
165	2 C	早借ヤワタ古墳群	早借	古墳				
166	4 C	大 浦 大浦				詳細不明		
167	2 C	久目トリノマエ	久目	古代・中世	須恵器・珠洲		101	
168	4 D	堀 田 館 / 山 堀 田				塚	94	
169	3 D	神 代 城	神代ノノ山	中世			94・103	
170	2 C	久 目 清 仙	久目	中世	珠洲		101	
171	4 D	堀田ニキ輪古墳群	堀田	古墳			94	
172	2 C	新保円山古墳群	新保・上田	古墳	土器器			
173	2 C	小久米B古墳群	小久米	古墳				
174	2 C	田 江 古 墳 群	田江	古墳				
175	2 C	日 本 田 古 墳 群	日本田	古墳				
176	1 C,D	一の島(岩瀬)城	一の島	中世			101・103	
177	3 B	中 村 横 六 郡	中村	古墳				
178	4 D	堀 田 東 谷 内 堀 田				詳細不明		
179	4 D	堀 田 ガ ス 山 堀 田				詳細不明		
180	2 C	久 目 梨 谷 古 墳 群	久目	古墳			101	
181	4 B	阿 尾 烏 尾 A 阿尾字烏尾	阿尾	縄文・古代～近世	須恵器・珠洲		102	
182	4 B	阿 尾 烏 尾 B 阿尾字烏尾	阿尾	縄文・古代～中世	縄文土器・須恵器		102	
183	4 B	阿尾潮戸ヶ谷内 阿尾		縄文	縄文土器		102	
184	3 D	神 代 テラヤンキ	神代	中世	珠洲			
185	3 D	堀 田 モリノ田塚	堀田	中世	珠洲	清滅		
186	2,3 C	高 松 城 跡	栗原・上田	中世			103	
187	3 C	中 尾 山 田 中尾字谷内		古代	須恵器	炭焼窯か		
188	3 C	泉 A 泉		古代	須恵器			

188	3 C	泉	B 泉	古代・中世	須恵器・珠洲			
189	4 C	能川	麻防社 能川	中世	珠洲			
190	3 B	柿谷	大口柿谷	中世	珠洲			
191	2 C	鹿苑	ソモギ観音	中世	珠洲			
192	2 C	早借	サカタ	早借	土師器			
193	3 C	加納	桜 打加納			詳細不明		
194	3 D	神代ハタケダ	神代字羽連	中世	土師器			
195	1 C	岩瀬	番 烟 岩瀬	縄文・弥生	石器		101	
196	1 C	岩瀬	谷内の前 岩瀬	縄文?			101	
197	1 C	老谷	老谷の上 老谷	縄文中期	縄文土器		101	
198	1 C	老	谷 老谷	中世		難跡か	101	
199	1 D	土倉	ゴマジマチ	土倉	縄文	石器	101	
200	2 C	見内	モリヒサ 見内	縄文		詳細不明	101	
201	2 C	久	目 梨 谷 久目	中世	珠洲		101	
202	2 C	久	目 朴 木久目	古代・中世	須恵器・珠洲		101	
203	2 C	久	目 大 壬 久目	近世		越中瀬戸	101	
204	2 C	久	目 大 町 久目	古代・中世	須恵器・珠洲		101	
205	2 C	久	目 ゾウダナ 久目	古墳・古代	須恵器		101	
206	2 C	久	目 桑 の 木久目	古代・中世	須恵器・珠洲		101	
207	2 C	久	目 子 清谷 内 久目	中世	珠洲		101	
208	3 B	余川	善 名余川	中世	珠洲		100	
209	4 C	朝日	接 話 朝日本町	中世	五輪塔など		85	
210	3 C	大野	沢 大野(沢)	縄文・古代	石斧・土師器・須恵器		45	
211	3 C	上田	南 僕 上田	縄文・古代	縄文・土師器・須恵器			
212	2 C	池 尾	山 早借	中世	土師器・珠洲	寺院跡か	90	
213	3 C	上 田	A 上田	古代	須恵器			
214	3 C	上 田	B 上田		土師器・馬枕			
215	3 B	梅谷	山古墳群	古墳	铁刀・铁鎌・土器		45	
216	4 A	戸津宮	中世	石造物・珠洲			78	
217	4 A	長坂	行 入 塚 長坂	中世	石造物		78	
218	4 C	朝 日	山 篠 季町	中世			103	

### 水見市遺跡地図参考文献

- 富山県水見郡役所 1915 「古墳二聞スル調査」(行政資料)
- 上田三平 1918 「越中水見郡大境洞窟内の弥生遺跡」『歴史地理』32巻4号
- 柴田常忠 1918 「越中水見郡字波村大境の白山社洞窟」『人類学雑誌』33-7
- 松村 瞳 1918 「越中大境洞窟内発見の人骨」『人類学雑誌』33-7
- 松村 瞳 1918 「新発見の洞窟内遺跡」『教育画報』7-1
- 阿部余四男 1919 「越中水見洞窟の股骨の一處」『人類学雑誌』34-10
- 小金井良精 1919 「日本石器時代人の歯牙を変形する風習について」『人類学雑誌』34-11~12
- 小金井良精 1920 「日本石器時代の赤き人骨について」『人類学雑誌』35-11~12
- 佐藤伝藏 1920 「地学上より見たる越中水見の洞窟」『地学雑誌』32-177
- 大村正之 1921 「石器時代及古墳時代遺跡」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査会報告』第2号
- 大村正之 1922 「大境洞窟住居址」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査会報告』第3号
- 大村正之 1923 「水見郡加納村加納横穴群」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査会報告』第4号
- 大村正之・林喜太郎 1924 「朝日貝塚発掘調査報告」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査会報告』第6号
- 岡本規矩男・大井敏雄・二井一馬 1927 「越中水見朝日貝塚人骨発掘予報」『人類学雑誌』42-3
- 後藤守一 1927 「大境洞窟」『日本考古学』16
- 柴田常忠 1927 「石器時代住居址概論」『石器時代の住居址』
- 長谷部曾人 1927 「大境洞窟の遺跡に就て」『先史学研究』
- 林喜太郎 1927 「朝日先住民族遺跡」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査会報告』第8号

- 19 林喜太郎 1930 「猿無川横穴古墳」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第10号
- 20 林喜太郎 1930 「阿尾城跡付近史蹟」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第10号
- 21 大村正之 1932 「朝日貝塚東方湊川沿岸の発掘物」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査会報告』第12号
- 22 九鬼愛雄 1932 「阿尾城址」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査会報告』第12号
- 23 鳴尾正一 1937 「郷土史料—朝日貝塚の土器紋様」
- 24 早川莊作 1937 「越中大坂洞窟発見の綱緯」『中部考古学会集報』4月号
- 25 渡 義 1937 「越中訓永見町岩上発見石臼」『中部考古学会集報』3月号
- 26 片山逸郎 1938 「朝日貝塚人土鉄骨の人類解剖学的研究」『金沢医科大学解剖学業績』第31冊
- 27 鳴尾正一 1940 「阿尾城址」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第14号
- 28 早川莊作 1940 「越中における弥生式文化の遺物について」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第14号
- 29 鳴尾正一 1950 「阿尾村の指崎古墳—その発掘について」水見郷土学会
- 30 富山県史蹟名勝天然紀念物調査会・富山考古学会 1950 「史蹟朝日貝塚第3回発掘報告」
- 31 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1950 「富山県水見地方横穴古墳調査報告書」
- 32 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1951 「昭和25年度研究調査報告集」
- 33 林 夫門 1951 「朝日貝塚の自然遺物」『大境』第1号
- 34 渡 義 1951 「朝日貝塚遺跡内の泥炭地包含層」『大境』第1号
- 35 鳴尾正一 1952 「大境の洞窟遺跡」『富山教育』45~48号
- 36 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1952 「朝日長山古墳発掘調査報告書」
- 37 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1955 「加納横穴古墳発掘報告」「沖布遺跡発掘報告」「水見高校歴史クラブ報告書No.5」
- 38 横本芳雄 1955 「小庭庵寺の心懐と瓦窯址」『越中史蹟』第5号
- 39 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1956 「昭和30年度調査報告集」
- 40 水見市文化財保存会 1957 「大境洞窟遺跡と朝日貝塚」
- 41 柳原龍寛 1957 「火葬場墓信仰と北陸地方出土須恵器骨壺考」『越中史蹟』第12号
- 42 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1958 「柳田遺跡調査報告書」
- 43 清水一布 1960 「滋浦誌」
- 44 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1961 「故郷の城址」
- 45 上庄村史編纂委員会 1963 「上庄村史」
- 46 水見市史編修委員会 1963 「水見市史」
- 47 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1964 「富山県水見地方考古学遺跡と遺物」
- 48 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1966 「朝日水源地遺跡調査報告」「加納西第22・23号横穴古墳発掘報告」「水見高校歴史クラブ報告書No.12」
- 49 渡 義 1966 「水見海岸の人文景観と文化財」『水見海岸二上山学術調査書』
- 50 渡 義 1969 「水見市上久津呂遺跡」『富山考古学会通報紙』33
- 51 加納史話編集委員会 1970 「加納史話」
- 52 斎藤道保 1970 「富山県水見市加納西第22・23号横穴」『日本考古学年報』18
- 53 渡 義 1970 「四十塚遺跡緊急発掘調査と埋藏文化財の破壊」(パンフレット)
- 54 西井龍儀 1971 「水見市谷屋発見の子持勾玉」『考古学ジャーナル』No.54
- 55 富山県 1972 「富山県史」考古編
- 56 水見市教育委員会 1972 「大境の洞窟遺跡—その保護」
- 57 水見市教育委員会 1973 「富山県水見市朝日長山古墳調査報告書」
- 58 水見市教育委員会 1975 「富山県水見市九戸製塙遺跡調査報告書」
- 59 水見市立池田小学校 1975 「水戸一池田小学校と校下の歴史ー」
- 60 余川のあゆみ編集委員会 1976 「余川のあゆみ」

- 61 児島清文 1977 「湯山城私考」『富山史壇』第66号
- 62 稲積教育百年史編纂委員会 1978 「稲積教育百年——教育と歴史——」
- 63 細川真樹 1978 「加納横穴墓群の諸問題」『学藝II』高岡第一学園
- 64 富山県教育委員会 1979 「昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧」
- 65 児島清文 1980 「阿尾城史話」『永見春秋』創刊号
- 66 水見市教育委員会 1980 「富山県水見市堀田大久前遺跡発掘調査報告」
- 67 水見市教育委員会 1980 「富山県水見市鞍川金谷包含地、一の瀬包含地調査概報」
- 68 細川真樹 1980 「朝日横穴墓」『永見春秋』創刊号
- 69 渕 春 1980 「最古の日本人骨か—幻の治創穴人十五年の顛末」『永見春秋』創刊号
- 70 渕 春 1980 「漸川柵遺史推考」『永見春秋』第2号
- 71 松島 洋 1981 「永見十二町潟低湿地の断面露頭」『富山教育』709号
- 72 水見市教育委員会 1982 「富山県水見市長坂貴船遺跡試掘調査報告書」
- 73 安田喜彦 1982 「花粉分析から見た富山湾沿岸の纏文前期の遺跡」『小泉遺跡』大門町教育委員会
- 74 水見市教育委員会・永見市立博物館 1983 「永見市遺跡図鑑」
- 75 渕 春・児島清文 1983 「中尾古鉄埋置遺跡」『永見春秋』第7号
- 76 調本恭一 1984 「加納横穴墓群」『永見市立博物館年報』第2号
- 77 水見市教育委員会 1984 「富山県水見市小久米古墳群・小久米A遺跡試掘調査報告書」
- 78 水見市教育委員会 1984 「富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書」
- 79 藤田富士夫 1984 「『富山県』特集:最後の前方後円墳」『古代学研究』第105号
- 80 小島俊彩 1985 「朝日貝塚の朝日下層式土器再見」『大境』第9号
- 81 林 夫門・溝口優司 1985 「富山県朝日・小竹両貝塚出土の纏文時代人骨について」『国立科学博物館専報』18号
- 82 水見市教育委員会 1985 「富山県水見市小久米A遺跡発掘調査報告書」
- 83 水見市教育委員会・富山県砂防課 1985 「富山県水見市鞍田薬師中世墓発掘調査報告書」
- 84 松浦秀治 1985 「富山県水見市治創穴から出土した人骨のフッ素含量」『国立科学博物館専報』18号
- 85 調本恭一 1986 「永見市朝日本町出土石造物」『永見市立博物館年報』第4号
- 86 水見市教育委員会・八代仙ダム建設計画に係わる文化財調査団 1986 「八代仙ダム建設計画に係わる文化財調査概報——地形地質・生物・埋蔵文化財」
- 87 平口哲夫 1986 「富山湾沿岸における纏文時代のイルカ捕獲活動」『大境』第10号
- 88 西井龍儀 1987 「小森瓦窯跡」『北陸の古代寺院』 桂書房
- 89 西井龍儀 1987 「小蓮庵寺」『北陸の古代寺院』 桂書房
- 90 遠川村史編集委員会 1987 「遠川村史」
- 91 大野 実 1988 「稲積西ヶ谷内遺跡出土遺物」『永見市立博物館年報』第6号
- 92 高岡 橙 1988 「堀田城について」『両越地域史研究』創刊号
- 93 西井龍儀・林寺義州・大野 実 1988 「永見市圓カンア窯跡」『大境』第12号
- 94 水見市教育委員会 1988 「富山県水見市堀田西谷内遺跡試掘調査報告書」
- 95 山本正敏・大野 実 1988 「永見市十二町潟排水機場遺跡の資料」『大境』第12号
- 96 小片 保・加藤克知・六反田篤 1989 「富山県水見市治創穴から出土した人骨の形質について」『人類学雑誌』97-3
- 97 北 哲・小堀卓治 1989 「発見された藤原期の出土仏」『永見春秋』第20号
- 98 水見市教育委員会 1989 「脇方横穴群」
- 99 水見市教育委員会 1989 「国指定史跡石動山文化財調査報告書」

## 第3章 調査の成果

### 第1節 これまでの調査

脇方横穴群は氷見市脇方字丑ヶ端に所在している。横穴群は国道160号灘浦トンネルの周辺から北東に向かっての丘陵斜面、約200mの範囲の標高8~15mの地点に分布している。

横穴の一部は古くから開口して、地元の人にも知られていたらしく、「鬼の穴」「火の雨の降った時の穴」と言い伝えられたという。

昭和初年、清水一布氏が第1号横穴を調査し、二体の人骨が左奥に頭を向けて埋葬されているのを確認した。またその人骨を金沢医科大学（現在の金沢大学医学部）の岡本博士に送り、鑑定を求めたという。人骨以外に出土遺物があったかどうかは不明である。

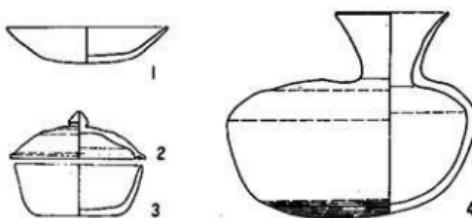
昭和25年には齊藤道保氏を中心とした氷見高校歴史クラブが氷見地域の横穴を集成し、脇方横穴群を紹介した。この調査により歴史クラブは4基の横穴を確認しており、さらに数基の横穴の存在を予測している。その後、同校歴史クラブは灘浦中学校社会クラブと協力して、昭和30年8月19日に、第5・6号横穴を発掘調査した。この調査では第5号横穴から数個の人間の歯を検出し、第6号横穴から人骨1体・須恵器平瓶1・須恵器杯1を検出している。また第6号横穴の人骨は、奥壁と平行に、頭部を狭道から見て右側にして埋葬されていた。

昭和33年10月には、灘浦トンネルの工事の際に第3・4号横穴が発見され、清水氏・鳴尾正一氏・円仏三郎兵衛氏らが調査をした。この調査で第4号横穴から人骨2~3体分・鉄刀2又は3・須恵器破片・土師器杯1・管玉3又は4・切子玉3が出土している。

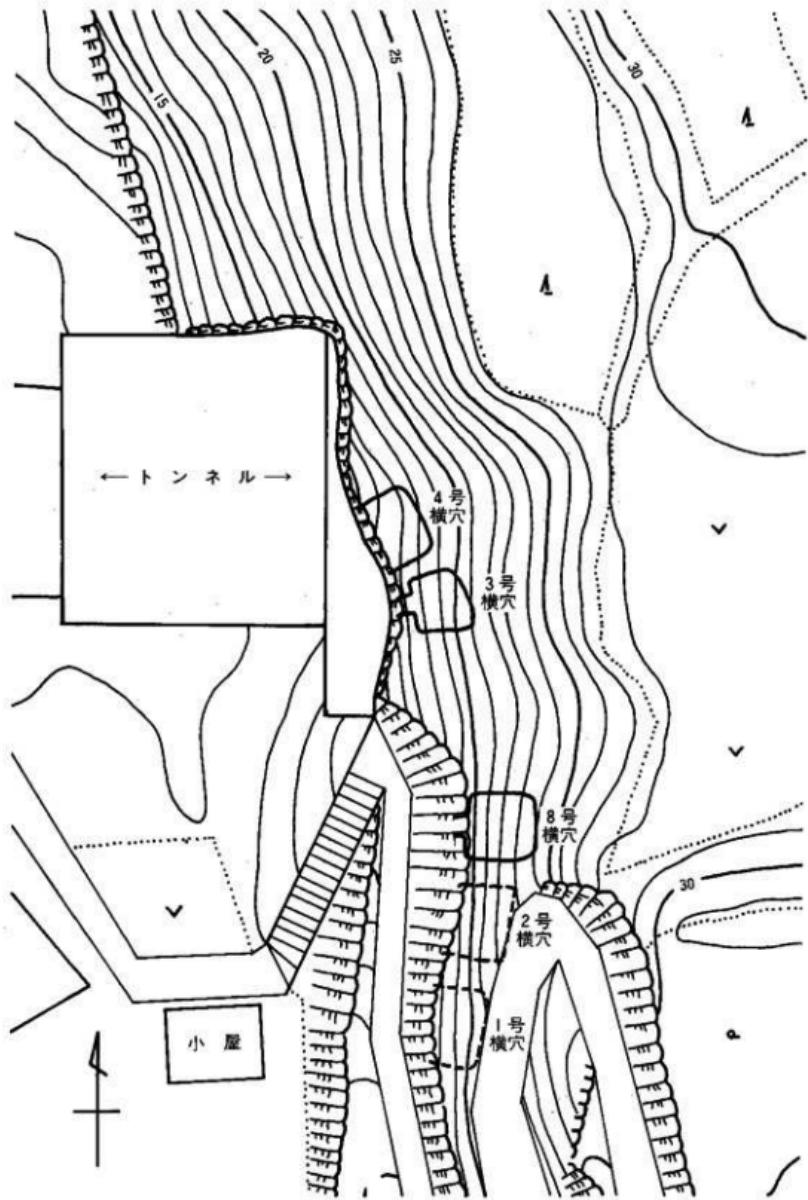
以上の調査をまとめた氷見高校歴史クラブ『富山県氷見地方考古学遺跡と遺物』では、7基の横穴群として紹介している。

その後、第2号横穴左側の樹木が災害で落下し、新たな横穴が見つかっている。今回これを第8号横穴とした。また今藏神社参道階段西側に、横穴と推定する穴が2ヵ所残っている。

なお、昭和30年の出土品は灘浦中学校が、昭和33年の出土品は氷見高校が保管している。このうち氷見高校保管の遺物は、昭和57年に市立博物館が開館したときには一括寄託を受けた。他の遺物は、所在不明である。



第22図 脇方横穴群の過去の出土遺物  
1は土師器、他は須恵器 (1/4)  
(「富山県史」考古編から転載)



第23図 調査横穴の位置 (縮尺 1/200)

## 第2節 調査の概要

今回調査対象とした横穴は、第3・4・8号の3基の横穴である。このうち第3・4号横穴は昭和33年に一度調査されているが、今回改めて内部を清掃し、実測をおこなうことにしたるものである。従って調査の主眼は未調査の第8号横穴においていた。

3基の横穴はいずれも崖面に位置するため、それぞれに木製の足場を設置し、排土は滑車に結びつけたバケツで地面に降ろした。また排土はふるいに通し、小さな遺物を見逃さないように努めた。

調査は第8号横穴から取り掛かった。ここでは覆土の高いレベルからも人骨が出土して、実測等に手間取った。また覆土上部はしまりが悪く、断面でたびたび崩壊し、出土位置を記録できなかった遺物もあった。上層の遺物を取り上げたのち、再び覆土を排除し、床面の人骨を検出、実測をおこない取り上げた。最後に横穴の実測図を作成し、次の第3・4号横穴の調査に移った。第3・4号横穴は清掃をして、再実測をおこなうだけであったが、両者の覆土から若干の人骨が出土した。この人骨については、地元の人から、昭和33年の調査で出土した遺物のうち人骨だけは再び横穴内に戻した、との聞き取りを得ることができたので、改めて採集して、鑑定することにした。

以上の調査期間は、平成元年4月11日から6月30日までのうちの32日間である。この間5月8日に氷見警察署刑事防犯課による出土人骨の確認、5月10日に富山医科大学森沢佐蔵助教授の現地調査、5月16日に富山県教育委員会文化課の視察・指導があった。なお6月の現地調査は博物館特別展準備のため、断続的なものとなった。



第24図 氷見警察署の立合い



第25図 富山医薬大森沢助教授の調査

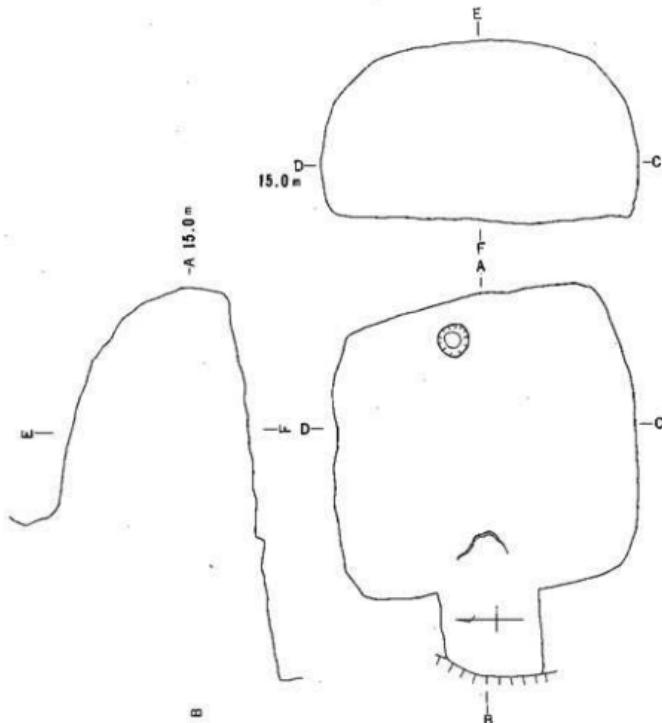
### 第3節 第3号横穴

第3号横穴は、海側から数えて4番目の横穴にあたり、ほぼ西に向いて開口する。第1・2・8号横穴とはほぼ同じレベルに位置し、狭道入口床面のレベルは約14.5mである。昭和33年に一度発掘されているが、今回床全面が覆土で覆われていた。これは発掘当時の埋め戻しと、その後の自然流入によるものであろう。

#### 構造

第3号横穴では、玄室と狭道が確認できた。崖面に開口するため、若干の崩壊が予想されるが、床面はほぼ築造当時の構造を残していると考える。それに対して天井は、狭道の全体と玄室の約3分の1で崩壊し、失われている。

狭道は長さ60cm、幅70cmを測る。床面から高さ約30cmで崩壊しているため、詳しい構造は不明である。玄室は長さ206cm、最大幅214cm、現存高126cmを測る。平面形は隅丸方形、立面形はドーム形である。狭道からみて左側壁がやや短く、いびつな形である。排水施設は無いが、床



第26図 第3号横穴実測図 S=1/40

面が入口に向けて約 $10^{\circ}$ の角度で傾いているため、自然に排水作用をおこなったと考えたい。また床面には浅い穴や段が確認できたが、その性格は不明である。なお玄室側壁及び奥壁から天井にかけて縦位に、幅約12cmを1単位とした凹型の工具痕が残っている。

### 遺物

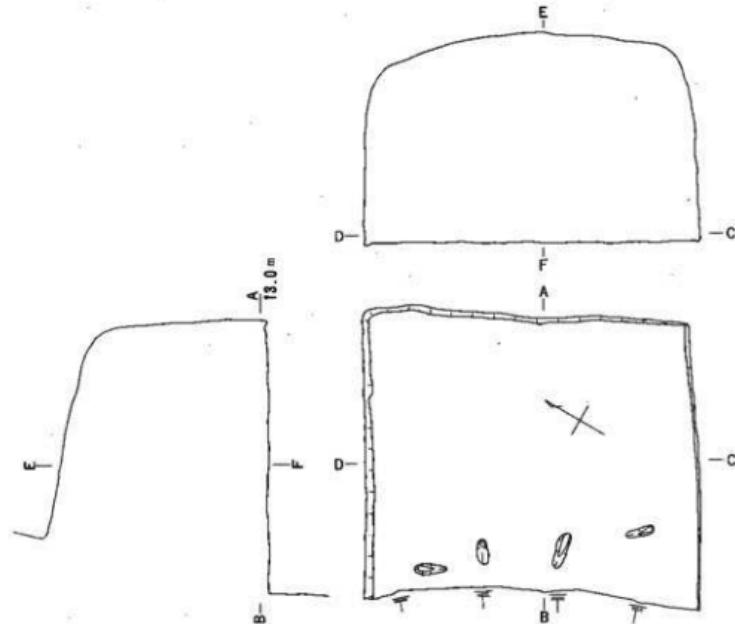
出土した遺物は人骨のみである。この人骨は昭和33年当時出土したものと再び横穴内に戻したものである。詳しい所見は第4章で述べる。

### 第4節 第4号横穴

第4号横穴は、海側から数えて5番目の横穴にあたり、西～南西に向けて開口する。第1～3・8号横穴より一段低く築造され、床面のレベルは約12.9mを測る。昭和33年に一度発掘されているが、今回床全面が覆土で覆われていた。これは発掘当時の埋め戻しと、その後の自然流入によるものであろう。

### 構造

第4号横穴では、玄室の大部分が確認できた。羨道と玄室の一部はかなり以前に崩壊して失われたと思われる。玄室は現存長197cm、最大幅236cm、現存高156cmを測る。平面形は方形、立面形はアーチ形である。平面形は正方形に近い形であったと推測する。床面には壁に沿って幅



第27図 第4号横穴実測図 S=1/40

1～6cm、深さ1～3cmの排水溝がめぐる。床面はほぼ水平である。玄室床面に棒状のものを打ち込んだような痕があるが、性格は不明である。また工具痕も確認できなかった。

#### 遺 物

出土した遺物は人骨のみである。この人骨は昭和33年当時出土したもの再び横穴内に戻したものである。詳しい所見は第4章で述べる。

#### 第5節 第8号横穴

第8号横穴は、海側から数えて3番目の横穴にあたり、ほぼ西に向いて開口する。第1・2・3号横穴とはほぼ同じレベルに位置し、狭道入口床面のレベルは約13.4mである。数年前に災害で樹木が落下して存在が知られた。

#### 構 造 (第28図)

第8号横穴では、玄室と狭道が確認できた。崖面に開口するため、狭道入口で若干の崩壊が予想されるが、ほぼ築造当時の構造を残していると考えたい。

狭道は長さ63cm、幅95cm、高さ130cmを測り、正面からみてほぼ長方形に造っている。玄室は長さ207cm、最大幅250cm、高さ154cmを測る。平面形は隅丸方形、立面形はドーム形である。排水施設は無いが、第3号横穴と同じく、床面が入口に向けて約10°の角度で傾いているため、自然に排水作用をおこなったと考えたい。また玄室天井から壁にかけて縦位に、幅約12cmを一単位とした凹型の工具痕が残っている。

#### 層 位 (第28図)

横穴はすでに開口しており、多量の土砂が流入していた。覆土の厚さは狭道で95cm、玄室奥壁で20cmを測る。

覆土は4層に分層できる。すなわち上位から、1：茶褐色シルト質土（しまり悪い）、2：白灰色シルト岩盤片、3：茶褐色シルト質土（シルト岩盤片含む）、4：白灰色シルト岩盤片（茶褐色シルト質土を含み、堅くする）である。

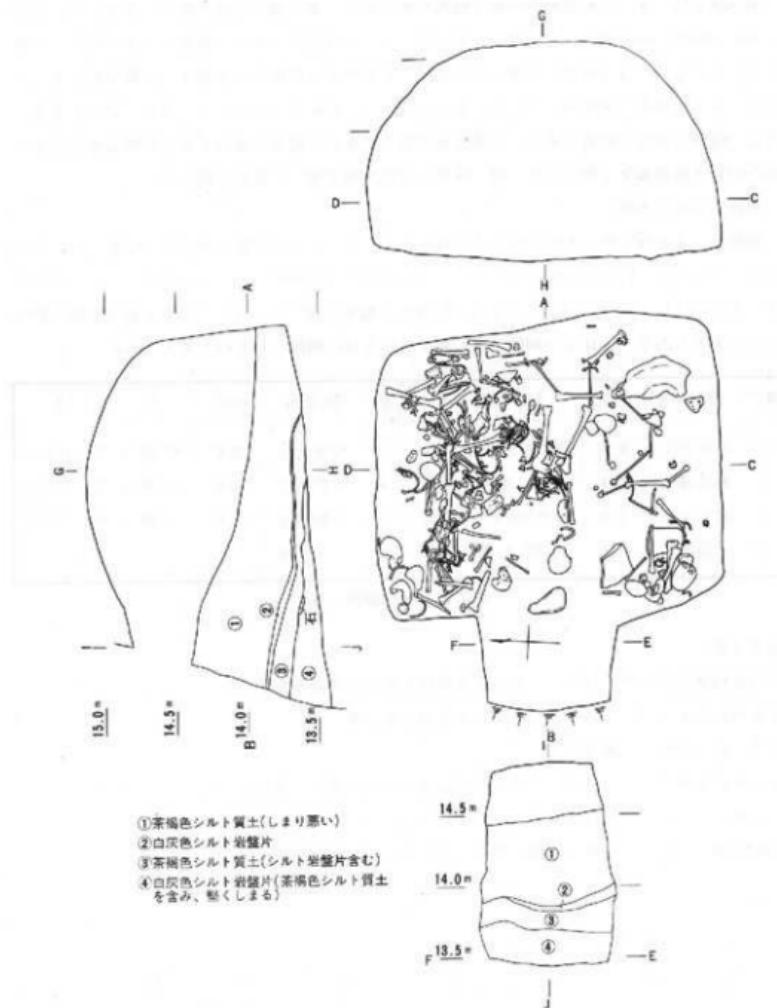
覆土の大半は第1層であり、これは純粋な自然流入土と考えられよう。これに対して第2～4層は、基本的には自然流入によるものと考えるが、薄くはがれたシルト岩盤片が混ざっており、また奥壁まで到達していないのが特徴的である。なお第1層表面近くからシルト質の石を検出した。第1層の人骨はこの石の直下から出土している。

#### 遺 物 (第29図)

出土した遺物は、人骨・近代陶器・中世土師器・銅錢である。人骨については第4章で述べるために、ここでは人骨以外の遺物について記述する。

#### 近 代 陶 器

第29図1は、近代の越中瀬戸小型杯か。玄室北東奥の覆土上で表採した。口径7.5cm、器高3.5cm、底径2.9cmを測る。底部は削り出し高台であり、底部外面を除いて鉄釉を施す。いつかの時点で投げ込まれたものか。



第28図 第8号横穴実測図 S = 1/40

### 中世土師器

第29図2は、手づくね成形の中世土師器小皿である。第1層の人骨の間から出土した。口径6.9cm、器高1.7cmを測り、口縁端の一部を欠くが、ほぼ完形である。親指と人差し指で一段横ナデをおこない、ほぼ直角に口縁を折り曲げ、底部外面は指押さえを施す。口縁端部は丸くおさめ、さらに指頭で調整をしている。胎土はほとんど砂粒を含まないか、海鷺の骨片を多量に含む。焼成は良好で硬質であり、色調は赤橙色を呈する。能登の資料を基に四柳嘉章氏がまとめた中世土師器編年と照らせば、III—前期（14世紀前半頃）の資料に最も近い。

### 銅錢（図版3参照）

銅錢は、北宋銭7枚、不明1枚の計8枚が出土した。1と2は排土中からの採集、4と5は図示していないが、石15の下から出土した。3は玄室のほぼ中央、6～8は玄室入口近くの頭蓋骨（骨65・111）の下から出土している。いずれも腐食が激しい。1と2も第1層の上部の排土からの出土であり、これらの銅錢は全て第1層の人骨に関係したものと考えている。

番号	錢貨名	時代	初 鋸 年	番号	錢貨名	時代	初 鋸 年
1	景祐元宝	北宋	景祐元年(1034)	5	熙寧元宝	北宋	熙寧元年(1068)
2	嘉祐通宝	北宋	嘉祐元年(1056)	6	元豐通寶	北宋	元豐元年(1078)
3	聖宋元宝	北宋	建中靖國元年(1101)	7	大觀通寶	北宋	大觀元年(1107)
4	元豐通寶	北宋	元豐元年(1078)	8	□宋□寶	?	?

第2表 出土銅錢一覧

### 参考文献

- 水見高校歴史クラブ 1950 「富山県水見地方横穴古墳調査報告」
- 水見高校歴史クラブ 1956 「昭和30年度調査報告集」
- 清水一布 1960 「灘浦誌」
- 水見高校歴史クラブ 1964 「富山県水見地方考古学遺跡と遺物」
- 松原典明 1983 「古銭一覧表」「日本考古学小辞典」 ニュー・サイエンス社
- 四柳嘉章 1987 「中世土師器の編年」「西川島」 穴水町教育委員会



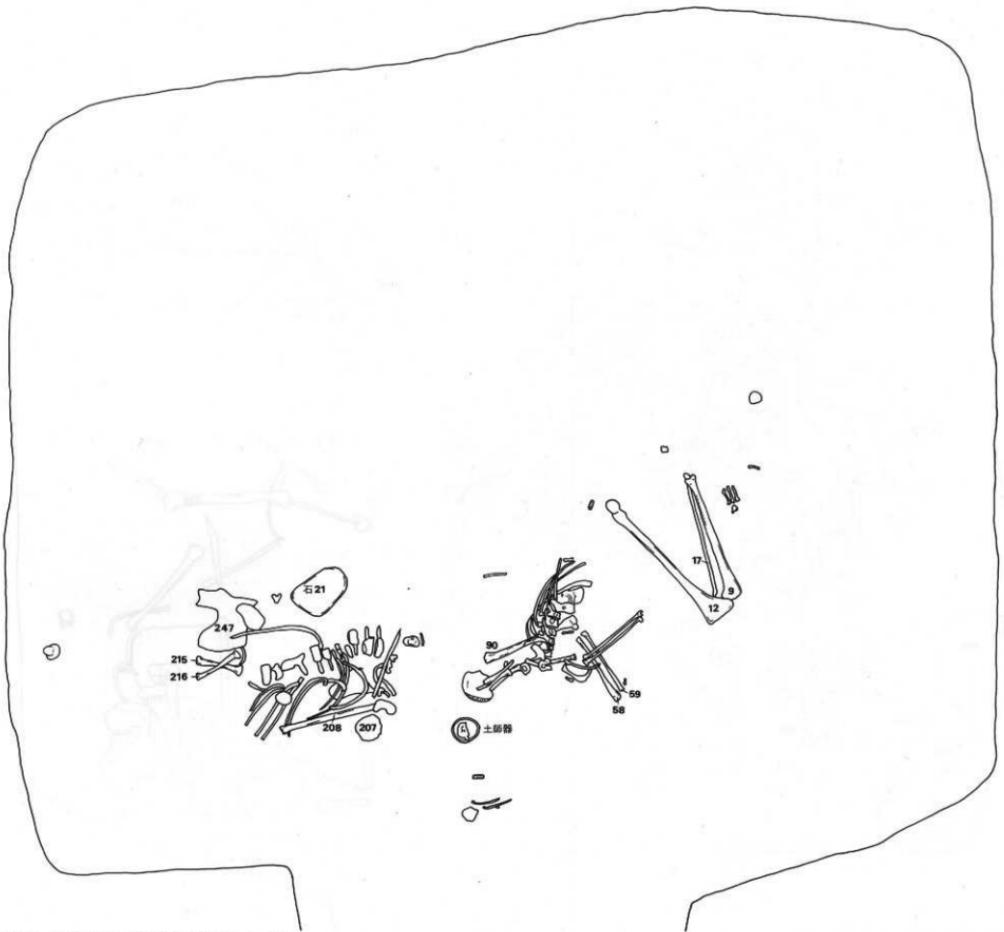
第29図 第8号横穴出土土器実測図(1/2)



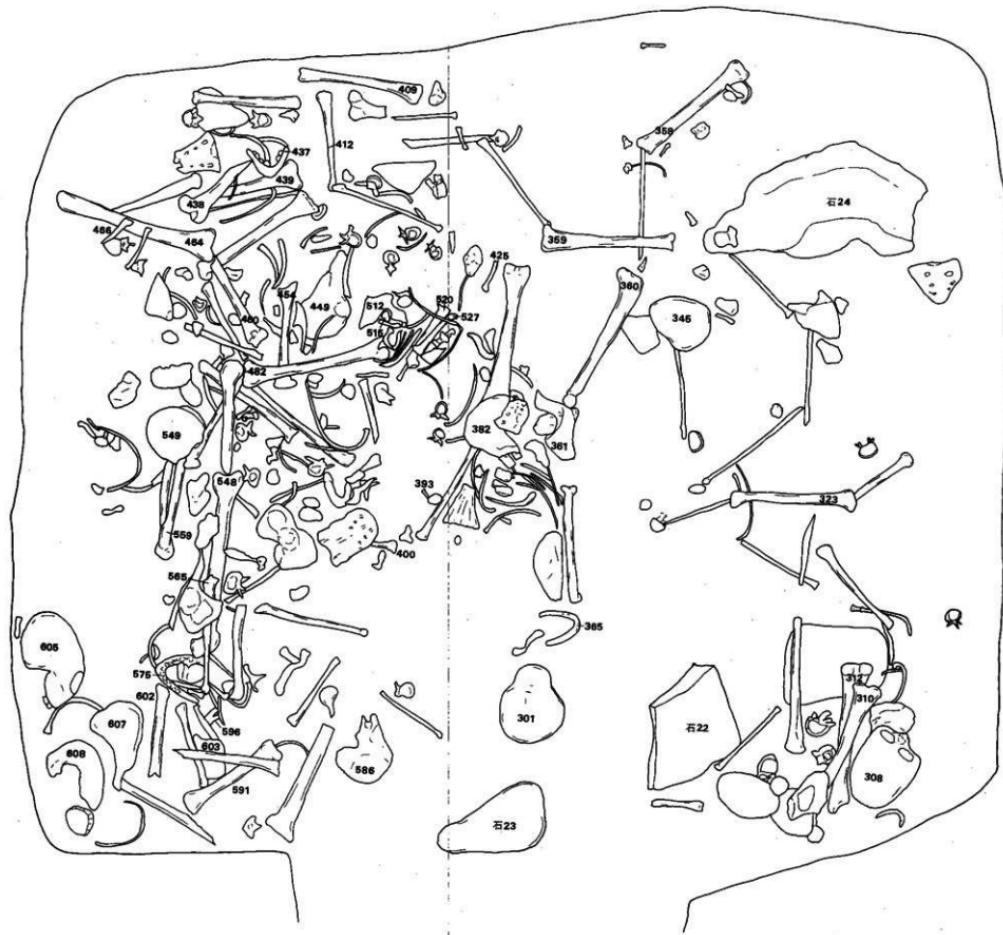
集39圖 第8號墓穴遺物出土狀態示意图(2) S=1/20



第31图 第8号横穴遗物出土状态示意图(2) S=1/20



第32图 第8号横穴遗物出土状態実測図(3) S=1/20



第33図 第8号横穴遺物出土状態実測図(4) S=1/20

## 第4章 富山県氷見市脇方横穴群出土人骨について

富山医科薬科大学医学部第一解剖学教室

森沢佐廉、中谷壽男、篠原治道、大谷 修

### はじめに

平成元年4月中旬～同年6月下旬に氷見市教育委員会が主体となり、脇方横穴群（所在：富山県氷見市脇方字丑ケ瀬）のうち、第3号横穴、第4号横穴および第8号横穴の合計3基の横穴の発掘調査を行なわれ、これらの横穴からいずれも人骨が出土した。そのうち、第3号横穴と第4号横穴の各出土骨は玄室内の擾乱層から一括出土している。第8号横穴の保存状態は良好であり、この横穴出土人骨は約50cmの間隔を挟んで上層出土人骨（以下、8A出土人骨と呼ぶ）と、下層出土人骨（以下、8B出土人骨と呼ぶ）とに分けられる。

これらの人骨の調査を依頼されたので主に人骨の個体数について報告する。なお、散乱人骨の個体数は性や年令に伴う人骨の特徴について、重複する部分骨の比較、左右側の個体識別などにより推定したが、左右側の観察可能な人骨の所見は原則として左側のみ記載する。また、第8号横穴出土人骨には原則として本文中の鉤括弧内に出土番号を記した。

### 1. 第3号横穴出土人骨

この人骨は散乱状態で出土しており、人骨の出土状態から頭位・体位は不明である。

出土人骨の骨種と観察個数は、頭蓋1個、上腕骨右1個、大腿骨右1個、胫骨左1個の部分骨である。これらの人骨の色調は淡黄色から黄褐色である。

人骨所見　頭蓋は不完全な頭蓋冠のみであり、前頭鱗と頭頂骨左右の各部がブレグマ部で互いに連続している。この部位の冠状・矢状の両縫合は内・外板ともに癒着を認めない。前頭鱗の厚径は4～5mmである。頭蓋冠の辺縁は齶食により丸く、その部位の板間層は露出している。

上腕骨右は遠位の骨幹・骨端約1/2である。破損端は階段状であり、辺縁には治癒像を認めない。遠位の骨幹端は上腕骨滑車と癒着し、その間の骨端線は消失するが、内側上顎には骨核の遊離面を認める。上腕骨の骨幹は太く（最小周57mm）、緻密質は厚い（骨幹中央部の高さに於ける緻密質厚径2.5～3.0mm）。

大腿骨右は遠位の骨幹約1/3である。破損端は階段状であり、辺縁には治癒像を認めない。遠位の骨幹端には骨端の遊離面を認める。骨幹は太く、緻密質は厚い。

胫骨左は遠位の骨幹・骨端約1/2である。破損端は階段状であり、辺縁には治癒像を認めない。遠位の骨幹は骨端と癒着完了し、骨端線は消失している。骨幹は太く（最小周77mm）、緻密質は厚い（骨幹中央部の高さに於ける緻密質厚径3.4～9.5mm）。骨端は大きい。

第3号横穴出土人骨の年令および性別は骨の大きさや形状から青年期男性骨1個体と推定する。

## 2. 第4号横穴出土人骨

この人骨は第3号横穴出土人骨と同様に散乱状態で出土しており、頭位・体位は不明である。

出土人骨の骨種と観察個数は頭蓋骨4個、下顎骨3個、頸椎・胸椎各1個、腰椎3個、仙骨2個、肋骨右4個、同左5個、肩甲骨左右各1個、鎖骨右2個、同左3個、上腕骨右4個、同左3個、桡骨右2個、同左4個、尺骨右2個、同左3個、寛骨左右各2個、大腿骨左右各5個、脛骨右3個、同左8個、腓骨右2個、同左5個、距骨右1個、同左2個、踵骨左右各2個、第一中足骨右2個、第二中足骨左1個の部分骨である。これらの人骨の色調は淡黄褐色である。

人骨所見　頭蓋、下顎骨、仙骨、上腕骨、寛骨、大腿骨、脛骨の順に述べる。

頭蓋：4個（頭蓋①～同④）出土している。頭蓋①は不完全な頭蓋冠であり、前頭鱗、頭頂骨左右、後頭鱗の各部分が縫合線で互いに連結している。主要頭蓋縫合のうち、矢状・ラムグ両縫合の内・外板とも癒着を認めないが、冠状縫合のプレグマ部の内・外板とも癒着開始している（癒着度：Martinの1度）。頭蓋の骨質は厚い（頭頂結節部厚径9.0mm）。上項線は弱く、外後頭隆起の膨隆は弱い（Brocaの1度）。後頭平面は強く後方へ膨隆している。頭蓋②は別個体の前頭鱗であり、骨質は厚い。この頭頂線には頭頂骨との癒着形跡を認めない。頭蓋③は頭頂骨左右と後頭鱗であり、骨質は厚い（厚径6～8mm）。矢状・ラムグ両縫合の癒着は進んでいる（Martinの3度）。頭蓋④は後頭骨の外側部左と後頭鱗のアステリオン部左の各一部である。骨質は薄い（後頭平面における厚径3mm）。前・後後頭内軟骨結合は癒着完了するが、この骨の結合面や縫合線には他の隣接骨との癒着形跡を認めない。後頭頸には骨核の遊離面を認める。

下顎骨：3個（下顎骨①～同③）出土している。下顎骨①は下顎体左と下顎枝左である。下顎体は薄く（下顎体厚11mm）、高い（下顎体高35mm）。オトガイ結節は弱い。オトガイ孔は第一・第二小白歯の歯槽部間で下顎体の中央の高さに位置する。顎下腺窩は深い。歯槽は右第一切歯部～左第三大臼歯部まであり、いずれも開放している。下顎骨②は破損により下顎体左・右、下顎枝左とに三分している。下顎体は厚く（下顎体厚13mm）、高い（下顎体高32mm）。オトガイ結節は強い。下顎枝は広く（下顎枝幅38mm）、下顎頭は前後に厚い（下顎頭幅12mm）。歯槽は右第三大臼歯部～右犬歯部、左第一切歯部～左第二小白歯部、左第三大臼歯部あり、いずれも開放している。下顎骨③は破損により左右の下顎体・枝に二分している。下顎体は厚い。下顎枝は狭い（下顎枝幅30mm）。下顎枝の後傾は強い（下顎枝角約120度）。歯槽は左右の第三大臼歯部～第二小白歯部あり、そのうち左右の第二・第三大臼歯部はいずれも委縮し、歯槽は閉鎖している。

仙骨：2個（仙骨①、同②）出土している。仙骨①は仙骨管の後壁のみであり、第一～第三仙椎の椎弓が完全に癒着している。仙骨②は第一～第五仙椎の椎弓と第三～第五仙椎の椎体とが癒着している。

上腕骨左：3個（上腕骨左①～同③）出土している。上腕骨左①は近位の約1/2の骨体であり、骨幹は太い（中央周63mm）。三角筋粗面は広い。上腕骨左②は骨幹の約4/5であり（最小

周53mm)、近位骨幹端には骨頭の遊離面が認められる。上腕骨左③はほぼ完全な骨幹であり(骨幹最大長164mm、最小周39mm)、遠・近位の両骨端は遊離している。

寛骨左：2個(寛骨左①、同②)出土している。寛骨左①は寛骨臼を含む部分である。3骨の骨体は癒着完了している。この寛骨臼は深く、大坐骨切痕は狭い。寛骨左②は寛骨臼と坐骨結節を含む部分である。3骨の骨体は癒着完了している。この寛骨臼は浅い。

大腿骨左：5個(大腿骨左①～同⑤)出土している。大腿骨左①は骨頭を欠くほぼ全長である。大・小転子は大きい。とくに骨幹は太い(中央周93mm)。殿筋粗面は稜状に隆起する。内転筋結節は強く上方へ突出している。大腿骨左②は約3/4の骨体であり、骨幹は太い(中央周91mm)。殿筋粗面は①より低い稜状に隆起し、転子下窩は深い。大腿骨左③は約3/4の骨体である(中央周77mm)。殿筋粗面は稜状に隆起し、その下端は粗線外側唇に連なる。大腿骨左④は遠位の骨幹約1/2であり、骨幹端には遠位骨端の遊離面を認める。粗線の発達は弱い(中央周78mm)。大腿骨左⑤はほぼ完全な骨幹であり(骨幹最大長120mm、中央周36mm)、近・遠位の両骨端は遊離している。大腿骨左①～③の上骨体断面示数はいずれも上骨体広型を示す。

胫骨左：8個(胫骨左①～同⑧)出土している。胫骨左①はほぼ全長であり(胫骨全長335mm)、骨幹は太い(骨幹周90mm)。胫骨左②は近位の約3/4の骨体・骨端であり、骨幹は太い(骨幹周83mm)。胫骨左③は近位の約3/4の骨体・骨端であり、骨幹は太く(骨幹周85mm)、ヒラメ筋線は強い。胫骨左④は約1/2の骨体である(最小周74mm)。胫骨左⑤は約1/2の骨体であり、骨幹は細く(最小周69mm)、破損端の緻密質は薄い。胫骨左⑥は約1/2の骨幹と思われ、骨幹は細く(最小周69mm)、後面の鉛直線は不鮮明である。胫骨左⑦は骨幹の約3/4であり、骨幹中央部で最も細い(最小周35mm)。胫骨左⑧は近位の約3/4の骨幹であり(最小周33mm)、骨幹端には近位骨端の遊離面を認める。胫骨左①～⑤の胫示数は厚胫2例(①、⑤)、中胫2例(②、③)、平胫1例(④)である。

第4号横穴出土人骨として胫骨右は8個ある。この散乱人骨群の年令構成について、骨端・骨核の出現と癒着、不動連結部の癒着、歯の出現と萌出、磨耗から、性別について推定年令に相当する骨の大きさ、形状、乳様突起の大きさ、眉間・外後頭結節の膨隆度、寛骨の大坐骨切痕の形態から判断すると、老年男性骨、熟年女性骨、壮年男性骨、壮年女性骨の各1個体および性別不明な青年骨1個体、少年骨1個体、幼年骨2個体、合計少なくとも8個体と推定する。

### 3. 第8号横穴上層出土人骨

第8号横穴玄室内上層より6個体分(8A-I号人骨、8A-II号人骨、8A-III号人骨、8A-IV号人骨、8A-V号人骨、8A-VI号人骨と仮称)の人骨が出土している。

1) 8A-I号人骨 出土位置：玄室の北西寄り。 頭位：南南東。 体位：仰臥位、上肢右肩の関節軽度内転位？肘関節強度屈曲位、左の肩関節軽度外転位肘関節伸展位？、下肢左右の股・膝関節強度屈曲位。 出土状態：ほぼ全身骨。 色調：褐色である。

人骨所見 主要頭蓋縫合の癒着：内・外板ともみられない。縫合骨はラムダ縫合(右4個、

左2個)にみられる。上面観：類楕円形で、頭蓋長幅示数は71.5の長頭型である。側面観：頭蓋長高示数は77.4の高頭型である。前頭骨の膨隆は弱く、眉間の膨隆は強い(Brocaの3度)。頭頂輪郭線は平等なる弧状をなす。後頭平面の膨隆は強い。後面観：砲弾状である。上項線は強い。外後頭隆起の膨隆は強い(Brocaの4度)。顔面観：前頭結節は弱い。下顎骨：下顎体は厚く、高い。歯槽部の萎縮は認められない。下顎枝は広い。翼突筋粗面の粗造度は強い。下顎角は外湾する。角前切痕が認められる。歯槽中に残存する永久歯10個(71～72、12、15～17)の咬耗度はマルチンの1度～2度である。下顎の第三大臼歯は左右とも未萌出である。体幹骨：椎体の上・下面の骨核は癒着完了している。仙骨は大きい。仙骨長幅示数は94.2の狭型である。この仙骨には仙骨管破裂を認める。上肢骨：尺骨の遠位骨端線の痕跡が骨表面よりみられる。上腕骨は太く(骨幹最小周64mm)、頑丈である。下肢骨：寛骨の腸骨・恥骨・坐骨の3骨の体部、大腿骨、胫骨の遠・近位骨端および骨核は癒着完了している。寛骨の腸骨翼、稜間にには骨端線の痕跡がみられる。恥骨結合面には水平位の骨棱と溝を数本認める。寛骨臼は広い。腸骨は広い。大坐骨切痕は狭い。大腿骨、胫骨の骨幹は太く(大腿骨骨幹中央周90mm、胫骨骨幹最小周79mm)、いずれも頑丈である。大腿骨後面の粗線は強く発達している。上骨体断面示数は74.5の超広型である。胫骨後面のヒラメ筋線は強く、鉛直線は骨幹中央部にまで達している。胫示数は62.3の平胫である。

以上の所見より、第8A-I号人骨の年令は頭蓋縫合の癒着未了、永久歯の咬耗度、第三臼歯の未萌出、上・下肢骨の骨端線の消失部位、恥骨結合面の形態から青年期の人骨である。また、性別は各骨とも大きく、頑丈で、筋付着部は粗造であること、眉間の膨隆が強いこと、寛骨の大坐骨切痕は狭いことから男性骨である。左大腿骨最大長432mmから推定身長は162.5cmである。

2) 8A-II号人骨 出土位置：玄室の東南寄り。頭位：西北西。体位：右側臥位、上肢右の肩・肘関節軽度屈曲位、左の肩関節伸展位肘関節強度屈曲位、下肢左右の股関節軽度屈曲位膝関節強度屈曲位。出土状態：ほぼ全身骨。色調：淡黄色～褐色である。

人骨所見 主要頭蓋縫合の癒着：冠状・矢状両縫合の内・外板とも認められないが、ラムダ縫合は癒着開始している(Brocaの1度)。頭蓋上面観：卵円形で、頭蓋長幅示数は76.4の中頭型である。ラムダ前圧痕は弱い。側面観：頭蓋長高示数は70.7の中頭型である。眉間の膨隆は強い(Brocaの3度)。外耳孔は円形で、外耳道骨瘤は認められない。乳様突起は大きい。底面観：大後頭孔は中等度の大きさで、菱形である。乳突切痕は強い。後頭動脈溝は狭く、深い。口蓋示数は90.4の口蓋広型である。口蓋は深く、紡錘形の矢状口蓋隆起を認める。後面観：家屋状で、頭蓋幅高示数は92.5の中頭型である。後頭骨は大きい。最上・上項線は強い。外後頭隆起の膨隆は強い(Brocaの2度)。顔面観：コルマンの上顎面示数は45.6の上顎面短型である。眉間の膨隆は強い(Brocaの3度)。鼻示数は54.7の鼻低型、眼窓示数は70.1の眼窓低型である。鼻頬示数は139.3の隆顎型である。梨状口は卵円形で、下縁は鋭利であ

る。眼窓口は鈍円四角形である。 下顎骨：大きい。下顎体は厚く、高い。歯槽部の萎縮は認められない。オトガイ孔は第二小白歯部下の下顎体中央の高さに位置する。オトガイ棘は強い。下顎頭右の前縁には前方へ延びる舌状の骨棘を認める。上・下顎の歯槽中に残存する永久歯28個（8I~8L、11~18、8I~8L）の咬耗度はマルチンの1度～2度である。これらの歯頸部には軽度の歯石を認める。下顎右第一・第二小白歯間および下顎左犬歯・第一小白歯間の隣接歯頸部にはう蝕を認める。 体幹骨：第V腰椎および第I尾椎の仙骨化が認められる。

上肢骨：骨端線はすべて消失している。上腕骨の骨幹は太く（最小周62mm）、頑丈である。

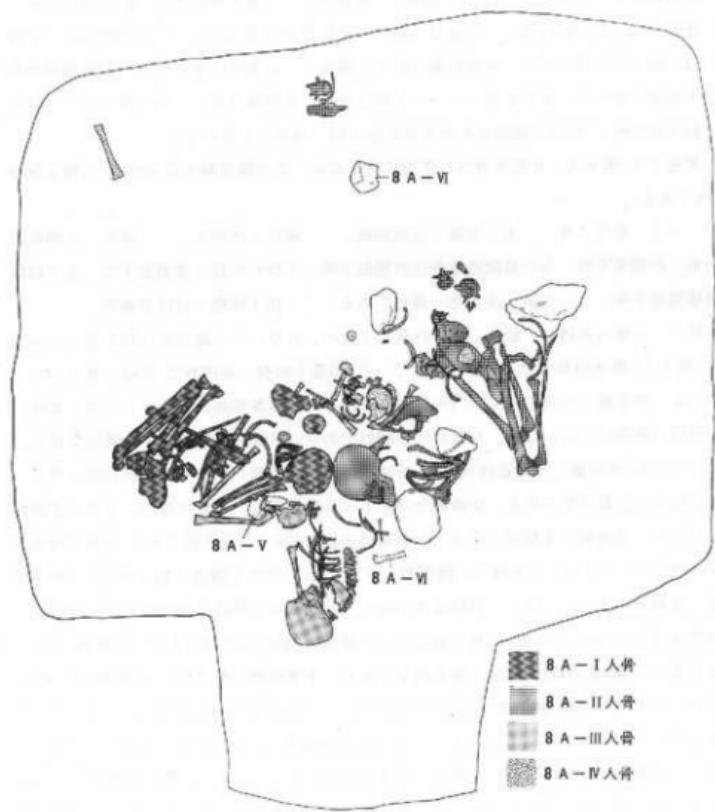
下肢骨：寛骨の大坐骨切痕は狭い。小骨盤は高い。大腿骨の骨幹は太く（中央周83mm）、上骨体断面示数は80.9の広型である。股筋粗面は稜状に隆起し、外側唇に連なる。大腿骨前頭部にはアレン頸窩を認める。脛骨後面のヒラメ筋線は強く、鉛直線は弱い。胫示数は78.9の厚脛である（最小周70mm）。脛骨下関節面の前方延長面は内・外側とも認めない。

以上の所見より、第8A-I号人骨は壮年男性骨である。左大腿骨最大長395mmから推定身長は155.6cmである。

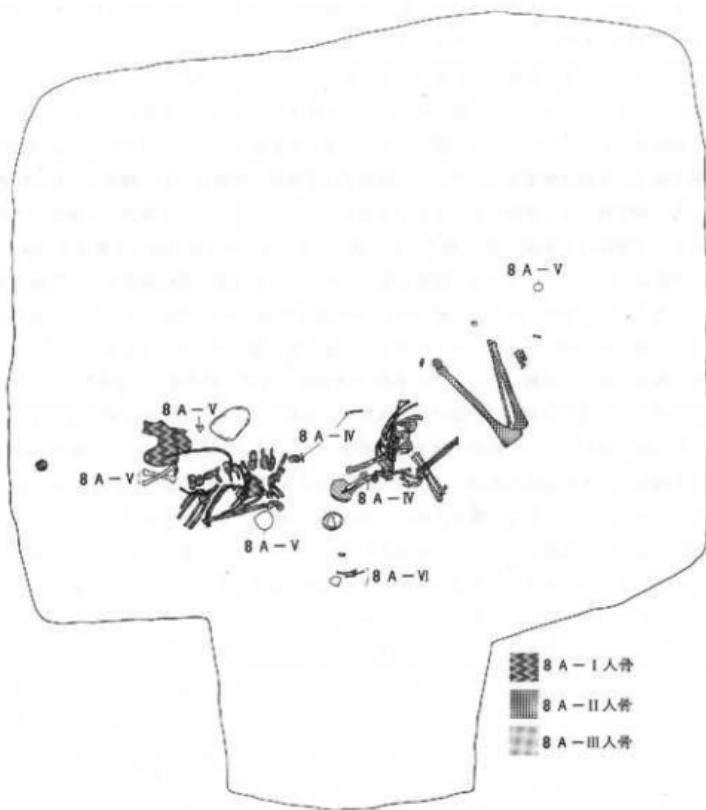
3) 8A-II号人骨 出土位置：玄室西側。 頭位：西向き。 体位：左側臥位、上肢右の肩・肘関節不明、左の肩関節伸展位肘関節不明、下肢右の股・膝関節不明、左の股関節伸展位膝関節不明。 色調：淡黄色～褐色である。 出土状態：ほぼ全身骨。

人骨所見 主要頭蓋縫合の癒着：内・外板とも認められない。小縫合骨は側頭骨左の頭頂切痕部に1個ある。蝶後頭軟骨結合部は遊離している。頭蓋上面観：卵円形で、長幅示数は75.1の中頭型である。側面観：長高示数は76.2の高頭型である。前頭輪郭線は全体として強く膨隆している。眉間の膨隆はみられない。外耳孔は倒卵形である。乳様突起は小さい。鎖乳突縫合は癒着完了している。底面観：外頭蓋底は広い。後頭頸の骨核は遊離している。乳突切痕は浅い。口蓋示数は83.6の口蓋中型である。切歯縫合は約1/3残存する。口蓋は深い。矢状口蓋隆起は認められない。後面観：家屋型である。頭蓋幅高示数は101.5の尖頭型である。外後頭隆起の影隆はみられない（Brocaの0度）。顔面観：ウィルヒョウの上顎面示数は68.2の上顎面低型である。前頭骨は大きく、広い。前頭結節は強い。前頭縫合の痕跡は鼻根部表面に認める。眉間の膨隆は弱い（Brocaの2度）。鼻示数は57.3の鼻低型、梨状口は卵円形で、前鼻棘は強い。眼窓口は円形で、眼窓示数は92.4の眼窓高型である。上顎歯槽示数は132.5の短顎型である。

下顎骨：小さい（下顎角幅88mm、オトガイ高27mm）。下顎結合は癒着消失している。オトガイ下切痕は認められる。オトガイ孔は第一・第二乳白歯部間の下顎体中央に位置する。オトガイ棘は弱い。下顎枝の後傾は強い。下顎角の外湾は認められない。上・下顎の歯槽中の乳歯10個（2I、2L、3I、3L、4I、4L、5I、5L、6I、6L）および永久歯4個（5I、5L、6I、6L）は萌出している（咬耗度：Martinの1～2度）。また、永久歯4個（3I、3L、4I、4L）は歯冠のみ形成し、いずれも未萌出である。 体幹骨：椎体と椎弓は癒着完了するが、椎体の上・下面および各種突起先端にはいずれも骨核の遊離面がみられる。第一・第二仙椎は外側部で癒着して



第34図 第8号横穴上層の人骨(i) (1/40)



第35図 第8号横穴上層の人骨(2) (1/40)

いる。 上肢骨：鎖骨の遠近両骨端、肩甲骨の関節窩、鳥口突起、肩峰、内側縁等の各骨核は体部から遊離している。上腕骨、尺骨の遠近両骨端は体部から遊離している（上腕骨、尺骨の最小周と最大長：46mm/204mm、25mm/170mm）。 下肢骨：寛骨の坐骨枝は恥骨枝と癒着完了するが、両骨の体部は腸骨体から遊離する。大腿骨の近位骨幹端には骨頭の遊離面を認める（最小周60mm）。上骨体断面示数は77.1の広型である。胫骨の中央断面は内側面を底辺とする二等辺三角形である。胫示数は80.9の厚胫である。

以上の所見より、第8A-III号人骨は性別不明な少年骨である。

4) 8A-IV号人骨 出土位置：I～III号人骨の奥で、玄室中央に散乱している。

頭位・体位：不明。 出土状態：ほぼ全身骨。

人骨所見 主要頭蓋縫合の癒着：骨質は薄い（前頭・頭頂結節部厚径2mm）。前頭骨、頭頂骨左右、後頭骨、側頭骨左右は縫合縁で大部分直接連結するが、前頭鱗の正中上縁はとくに薄く、切痕状であることから、この部位において泉門を形成していたと思われる。前頭縫合は鼻根部を除き、大部分癒着完了している。後頭骨は基底部、外側部左右、鱗部とに互いに遊離する。舌下神経管左は小骨棘により不完全ながら二分している。 下顎骨：下顎体と下顎枝左である。下顎体は正中部で高く、後方に向い低くなる（オトガイ高21mm、下顎体高16mm）。オトガイ切痕はみられない。オトガイ隆起は弱い。オトガイ孔は第一乳臼歯部下の下顎体中央の高さに位置する。下顎枝は小さい（最小枝高25mm、最小枝幅23mm）。角前切痕がある。歯槽中に残存する下顎乳歯3個（d）、d、e）は萌出し、永久歯2個（6）、6）は未萌出である。 体幹骨：椎体と椎弓は遊離している。肋骨頭、肋骨結節の骨核は肋骨体から遊離している。 上肢骨：肩甲骨の鳥口突起および諸骨核は体部から遊離している。肩甲骨は関節窓下端を中心とする約90度の扇形である。鎖骨の胸骨端は前後に扁平である（最大長63mm）。上腕骨骨幹の最高点は上腕骨頭と大結節間の骨稜に、最下点は鈎突窓直下の遠位骨幹端に位置する（最小周33mm、最大長107mm）。 下肢骨：腸骨は他の2骨体より遊離している。大腿骨の遠近両骨端、大小転子は骨幹より遊離している。大腿骨骨幹の最高点は骨頭と大転子間の骨稜に、最下点は内側頸骨隆起に位置する。大腿骨骨幹中央は前後に扁平である（中央周35mm、最大長134mm）。 脊骨の骨幹中央横断面は正三角形である（最小周31mm、最大長107mm）。

以上の所見より、第8A-IV号人骨は性別不明な幼年骨である。

5) 8A-V号人骨、同VI号人骨 出土位置：この横穴上層に散乱する。 頭位・体位：不明。 出土状態：ほぼ全身骨

人骨所見 第8A-V号人骨として後頭骨外側部右、後頭鱗、頭頂骨左右、頸骨右、肩甲骨右、腸骨右、大腿骨左、胫骨左各1個の所見は前述のIV号人骨に類似する（腸骨右幅109mm、大腿骨左中央周35mm、胫骨左最小周31mm）。また、第8A-VI号人骨として、後頭骨外側部右、頭頂骨右、腸骨左、大腿骨右、胫骨右の各1個は第IV号、第V号人骨よりさらに骨質は薄く、各骨とも小さい（腸骨左幅46mm、大腿骨右中央周30mm、胫骨右最小周28mm）が、これらの入骨

はいずれも性別不明な幼年骨と推定される。

#### 4. 第8号横穴下層出土人骨

第8号横穴玄室内下層の中央より1個体(8B-I号人骨)、南西側より1個体(8B-II号人骨)および主に北側より多数個体(8B-散乱人骨)が出土している。

1) 8B-I号人骨 出土位置: 玄室中央。 頭位: 南西。 体位: 仰臥位上肢左右の肩関節伸展位? 肘関節不明、下肢左右の股関節伸展位膝関節伸展位?。 出土状態: ほぼ全身骨。 色調: 淡黄色~淡褐色である。

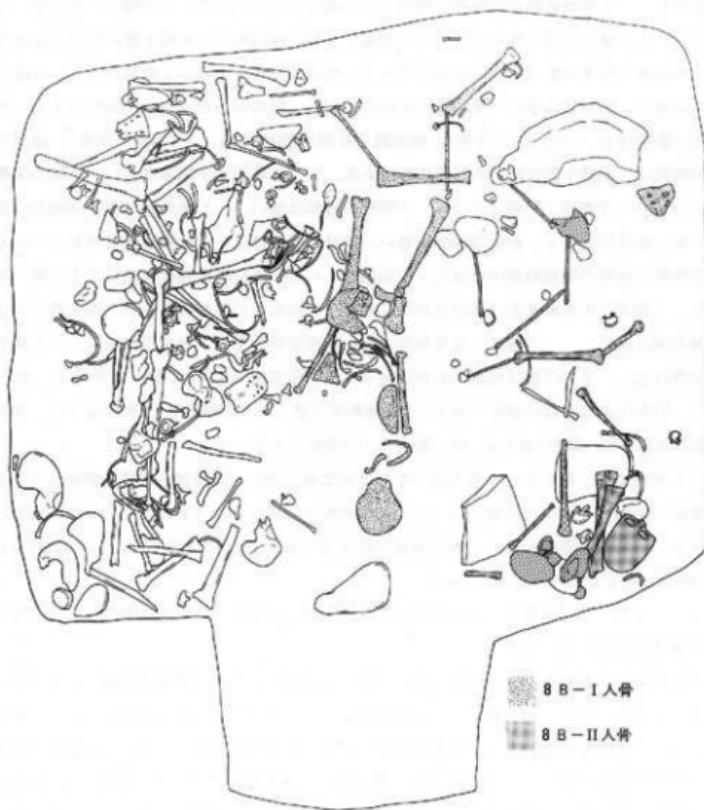
人骨所見 主要頭蓋縫合の癒着: 開始(冠状縫合: Martin 2度、矢状縫合: 同3度)または完了(ラムゲ縫合: 同4度)している。頭蓋上面観: 卵円形で、長幅示数は75.4の中頭型である。側面観: 長高示数は70.9の中頭型である。頭頂輪郭線は平等なる弧状をなす。後頭平面の膨隆は強い。咽頭窩は深い。後面観: 家屋状である。幅高示数は94.0の中頭型である。外後頭隆起の膨隆は弱い(Brocaの1度)。顔面観: 眉間の膨隆は強い(Brocaの3度)。眼窓口は鈍円四角形で、眼窓示数は80.5の眼窓中型である。 下顎骨: 下顎体は低い。下顎の歯槽部(「1、「3~「8)は萎縮・閉鎖している。下顎枝の後傾は強い。 体幹骨: 胸骨柄結合は化骨している。仙骨は大きく、前面の湾曲は強い。仙骨の基底は広い。仙骨横線は消失している。

上肢骨: 鎖骨の肋鎖靭帯圧痕は広く、陥凹している。菱形靭帯線は棱状に下方へ張り出している。上腕骨の中央断面形は鈍円四角形である。大結節後の隆起は高い。内側上頸は大きく、尺骨神経溝は深い。 下肢骨: 坐骨結節は強い。恥骨枝は太い。寛骨臼は大きい。大脛骨の転子間線は強く、その下端は粗線内側唇に連なる。筋筋粗面の粗造度は中等度で、転子窩は深い。骨幹上部は前後に扁平である(上骨体断面示数: 71.4の超広型)。胫骨は太い。後面の鉛直線は骨幹中央の高さに達する。胫示数は70.6の厚胫である。

以上の所見より、第8B-I号人骨の年令は骨端線の消失、頭蓋縫合の癒着開始、下顎歯槽部の萎縮・閉鎖、下顎枝の後傾が強いことから判断して老人期の人骨である。また、性別は各骨が大きい、眉間の膨隆が強い、筋付着部が粗造強であることから男性骨である。左大脛骨最大長410mmから推定身長は158.4cmである。

2) 8B-II号人骨 出土位置: 玄室南東側。 頭位・体位: 不明。 出土状態: ほぼ全身骨が出土している。

人骨所見 主要頭蓋縫合の癒着: 内・外板とも認められない。頭蓋上面観: 矢状溝状圧痕がわずかに認められる。側面観: 上・下側頭線は弱い。ブテリオン部は正常型である。顔面観: コルマンの上顎面示数は51.6の上顎面中型である。前頭骨は大きく、広い。前頭骨の湾曲は弱い。眉間の膨隆は強い(Brocaの2度)。鼻示数は53.9の鼻低型である。眼窓口は鈍円四角形で、眼窓示数は76.2の眼窓中型である。口蓋には切痕縫合の痕跡がわずかに認められる。切歯管の下口は大きく開いている。上顎左右犬歯の咬耗度はマルチンの3度である。 下顎骨: 大きく、広い(下顎角幅97mm、下顎体長77mm)。下顎体は厚く、歯槽部の萎縮は認められない。



第36図 第8号横穴下層の人骨 (1/40)

オトガイ結節は強い。オトガイ孔は第一・第二小白歯間の下顎体中央の高さに位置する。オトガイ棘は強い。下顎枝は広い（下顎枝幅39mm）。下顎枝の後傾は弱い。歯槽中の下顎の永久歯8個〔8〕-〔5〕、〔5〕-〔8〕の咬耗度はマルチンの1~2度である。そのうち、下顎左右第二大臼歯の歯冠中央にはう蝕を認める。  
上肢骨：骨端線はすべて消失している。鎖骨は短いが太い。肋鎖靭帯压痕は深く、円錐靭帯結節は大きい。上腕骨の中央断面形は鈍円四角形である。尺骨の回外筋線は強い。  
下肢骨：寛骨の3骨の骨体は癒着完了している。寛骨臼は大きい。恥骨結合面には水平位の棱と溝を各数本認める。大腿骨の粗線は弱い。転子窩は深い。上骨体断面示数は67.6の超広型である。胫骨の中央断面形は二等辺三角形である。腓骨は太い。  
以上の所見より、第8B-II号人骨は壮年男性骨である。左大腿骨最大長393mmから推定身長は155.2cmである。

### 3) 8B-散乱人骨

この人骨は第8号横穴玄室内の主に北西側下層より散乱状態で出土する。頭位・体位は不明である。5個体以上観察される骨種として、頭蓋5個、下顎骨5個、上腕骨左5個、桡骨右5個、同左5個、尺骨右5個、寛骨左5個、大腿骨右6個、同左7個、胫骨右5個、同左6個である。

人骨所見　頭蓋、下顎骨、上腕骨、寛骨、大腿骨、胫骨の順に所見を述べる。なお、この出土人骨には鉤括弧内に出土番号を記す。

頭蓋：5個〔610、549、605、608、345〕出土している。頭蓋〔610〕は後頭鱗と頭頂骨左右の乳突角を含む部位、側頭骨左右の乳突部である。骨質は厚い。これらの骨連結部は内・外板とも癒着完了している（Martinの4度）。後頭骨の上項線は強い。外後頭隆起の膨隆は強い（Brocaの3度）。頭蓋〔549〕は頭蓋の左半分である。主要頭蓋縫合は内・外板とも癒着を認めない。蝶後頭軟骨結合は癒着し、結合線は消失している。頭頂骨はラムダ部に認められる（高径37mm、幅径51mm）。頭蓋長高示数は73.3の中頭型である。前頭骨は全体として膨隆している。眉間の膨隆は弱い（Brocaの1度）。上・下側頭線は弱い。ブテリオンは正常型である。蝶乳突縫合は消失している。乳様突起は小さい。外後頭隆起の膨隆は弱い（Brocaの1度）。眼窓口は鈍円四角形で、眼窓示数は91.2の眼窓高型である。横口蓋縫合は後方に凸湾する。歯槽中の永久歯3個〔L5-L7〕の咬耗度はマルチンの1度である。頭蓋〔605〕は全形である。蝶後頭軟骨結合は癒着完了している。主要頭蓋縫合は癒着開始している。小縫合骨は後頭乳突縫合部左に1個（15.5mm×9.9mm）認める。頭蓋上面觀は類五角形で、長幅示数は77.0の中頭型である。長高示数は71.3の中頭型である。上・下側頭線は弱い。乳様突起は小さい。口蓋示数は74.4の口蓋狭型である。矢状口蓋隆起は認められない。後面觀は砲弾状である。幅高示数は92.7の中頭型である。後頭平面の膨隆は強い。外後頭隆起の膨隆は弱い（Brocaの1度）。コルマンの上顎面示数は51.2の上顎面中型である。眉間の膨隆度はプロカの2度である。鼻示数は50.6の中鼻型である。眼窓示数は82.1の眼窓中型である。歯槽中の永久歯3個〔7〕、〔6〕、〔6〕

の咬耗度はマルチンの1度である。頭蓋〔608〕は不完全な頭蓋冠であり、後頭骨、頭頂骨左右、側頭骨左、前頭骨、頸骨左、上顎骨左の各部分が縫合線で互いに連結している。これらの骨連結部は内・外板とも癒着を認めない。蝶形頭軟骨結合は遊離している。小縫合骨は側頭骨の頭頂切痕左に1個(15.0mm×10.0mm)認める。歯槽中の永久歯3個〔L5、L6、L7〕のうち、上顎左第一大臼歯は萌出するが、同第二小白歯、同第二大臼歯は未萌出である。頭蓋〔345〕は不完全な頭蓋冠であり、頭頂骨左右、側頭骨左右、蝶形骨大翼右、前頭骨は縫合線で連結するが、いずれも癒着を認めない。前頭縫合の痕跡は鼻根部にみられる。上顎骨口蓋突起には切歯縫合が残存している。歯槽中には切歯、犬歯の未完成な歯冠が埋伏している。

下顎骨：5個〔437、575、596、515、605〕が出土している。下顎骨〔437〕は不完全な下顎体、下顎枝左右である。下顎体は薄く、低い(オトガイ幅47mm、下顎体高27mm、下顎体厚14mm)。オトガイ下切痕は強い。オトガイ結節は弱い。下顎枝の後傾は強い。咬筋・翼突筋粗面は平滑である。歯槽中の永久歯5個〔7〕、〔6〕、〔4〕、「6」、「7」の咬耗度はマルチンの1度である。下顎左右第三大臼歯は未萌出である。下顎骨〔575〕はほぼ全形である。下顎骨は大きく、高く、広い(下顎体長75mm、オトガイ高30mm、下顎角幅98mm)。下顎体は厚く、歯槽部の萎縮は認められない。下顎枝は広く、高い(下顎枝幅35mm、下顎枝高61mm)。下顎左右第三大臼歯は未萌出である。下顎骨〔596〕は下顎体と下顎枝右である。下顎体は低い(下顎体高27mm)。下顎枝は狭く、低い(下顎枝幅32mm、下顎枝高49mm)。下顎右第一大臼歯は萌出する(咬耗度：Martinの1度)、下顎右第二、第三大臼歯はいずれも未萌出である。下顎骨〔515〕は下顎体と下顎枝左である。下顎体は低い(下顎体高21mm)。下顎枝は狭く、低い(下顎枝幅27mm、下顎枝高31mm)。歯槽中には永久歯5個〔3～7〕の歯冠のみ観察できる。下顎骨〔605〕はほぼ全形である。下顎結合は正中歯槽部の唇舌両側面と、オトガイ部の舌側面で認められる(歯槽部の唇舌両側面で癒着未了、オトガイ隆起部で癒着完了する)。下顎骨は小さく、低く、狭い(下顎長59mm、下顎枝高28mm、関節突起幅77mm)。下顎体は正中部で高く、後方に向い低くなる(オトガイ高18mm、下顎体高14mm)。オトガイ隆起の両側でオトガイ結節の上方には横橋円形の浅い陥凹が認められる。オトガイ孔は第1乳臼歯下の下顎体中央に位置し、その開口は上外方を向いている。下顎枝は狭く、低い(下顎枝幅20mm、下顎最小枝高23mm)。下顎枝の後傾は強い(下顎枝角133度)。角前切痕は大きく、浅い弓状であり、下顎角からオトガイ孔下に達する。下顎孔は下顎枝後縁近くに位置し、内側後方を向いている。筋突起先端は鳥帽子状である。下顎頭は小さい(左右径10mm、厚径6mm)。歯槽中には下顎左右第二乳臼歯、下顎右第一大臼歯の歯冠のみ観察できる。

上腕骨左：5個〔460、565、412、400、527〕が出土している。上腕骨左〔460〕は遠位の約4/5の骨体・骨端であり、骨幹は太い(最小周68mm)。上腕骨左〔565〕はほぼ全形で、骨幹は細い(最大長277mm、最小周53mm)。上腕骨左〔412〕は近位の約4/5の骨幹・骨端であり、遠位骨端は癒着完了、近位骨端は癒着未了である(最小周54mm)。上腕骨左〔400〕はほぼ完全

な骨幹であり、遠・近の両骨端は遊離している（最小周51mm）。上腕骨左〔527〕は骨幹の約4／5である（最小周38mm）。

寛骨左：5個〔607、586、449、603、588〕が出土している。寛骨左〔607〕、同〔586〕、同〔449〕はほぼ完形であり、いずれも腸骨、恥骨、坐骨の3骨体部は癒着完了している。そのうち〔586〕、〔449〕は腸骨棲、坐骨結節の各骨核との間に骨端線を認める。また、大坐骨切痕は〔607〕、〔449〕で狭いが、〔586〕で広い。寛骨左〔603〕、同〔588〕の腸骨は恥骨、坐骨の骨体より遊離している。

大腿骨左：7個〔548、559、482、591、520、466、425〕が出土している。大腿骨左〔548〕は全長であり、骨幹は太い（最大長427mm、中央周93mm）。大腿骨左〔559〕はほぼ全長であり、骨幹は細い（中央周80mm）。大腿骨左〔482〕は全長であり、遠位骨端線の痕跡が認められる（最大長372mm、中央周76mm）。これらの大腿骨左〔548〕、同〔559〕、同〔482〕の骨体上部は前後に扁平である（上骨体断面示数：77.6の広型、72.1の超広型、71.0の超広型）。大腿骨左〔591〕は遠位の骨幹約4／5であり、骨幹端には遠位骨端の遊離面を認める（中央周64mm）。大腿骨左〔520〕は遠位の骨幹約1／2である（中央周32mm）。大腿骨左〔466〕はほぼ完全な骨幹であり、遠近の両骨端および大・小転子は遊離している（中央周32mm）。大腿骨左〔425〕は近位の骨幹約1／2である（中央周26mm）。

脛骨左：6個〔439、409、454、602、512、393〕が出土している。脛骨左〔439〕は全長であり、骨幹は太く、脛骨後面のヒラメ筋線は強い。下関節面の内側前方には半月状の対距骨関節面が認められる（全長335mm、最小周86mm）。脛骨〔409〕はほぼ全長であり、骨幹は細く、ヒラメ筋線は弱い。近位骨端線の痕跡が認められる（最小周70mm）。脛骨左〔454〕は全長であり、遠近の両端線の痕跡が認められる（全長285mm、最小周67mm）。これらの脛骨左〔439〕、同〔409〕、同〔454〕の骨体上部は扁平でない（胫示数：67.0の中脛、67.2の中脛、74.5の厚脛）。脛骨左〔602〕は遠位の骨幹約4／5であり、骨幹端には遠位骨端の遊離面を認める（最小周63mm）。脛骨左〔512〕は骨幹の約1／2である（最小周46mm）。脛骨左〔393〕は完全な骨幹であり、遠近の両骨端は遊離している（骨幹最大長74mm、最小周25mm）。

第8号横穴下層出土人骨のうち、散乱出土人骨として大腿骨左が7個ある。この散乱人骨群の年令構成について、骨端・骨核の出現と癒着、不動連結部の癒着、歯の形成と萌出、咬耗度から、性別について推定年令に相当する骨の大きさ、形状、眉間・側頭骨乳様突起・外後頭隆起の膨隆度、寛骨の大坐骨切痕の形態から、老年男性骨1個体、壮年または青年男女性骨各1個体および性別不明な少年骨1個体、乳・幼児骨3個体の合計7個体分と推定する。

おわりに

富山県氷見市臨方横穴群のうち、第3号、第4号、第8号横穴出土人骨について、おもに個体数を検討したので以下にまとめる。

1) 第3号横穴出土人骨は最少限1個体分確認されている：青年男性骨1個体。

- 2) 第4号横穴出土人骨は最少限8個体分確認されている：老年男性骨1個体、熟年女性骨1個体、壮年男性骨1個体、壮年女性骨1個体および性別不明な青年骨1個体、少年骨1個体、幼年骨2個体。
- 3) 第3号、第4号横穴出土人骨は攪乱層中から一括出土している。
- 4) 第8号横穴出土人骨は間層を挟んで上層出土人骨（8A出土人骨）と、下層出土人骨（8B出土人骨）とに分けられる。
- 5) 第8号横穴上層出土人骨は最少限6個体分確認されている：第8A-I号人骨、青年男性骨。第8A-II号人骨、壮年男性骨。第8A-III号人骨、性別不明な少年骨。第8A-IV号・V号・VI号人骨、性別不明な幼年骨3個体。
- 6) 第8号横穴下層出土人骨は最少限9個体分確認されている：第8B-I号人骨、老年男性骨。第8B-II号人骨、壮年男性骨。第8B-散乱人骨、老年男性骨1個体、壮年又は青年男女性骨各1個体および性別不明な少年骨1個体、乳・幼兒骨3個体。
- 7) 第8号横穴上層出土人骨の頭蓋上面觀は類橢円形（8A-I）または卵円形（8A-II、8A-III）、頭蓋長幅示数は長頭型（8A-I）または中頭型（8A-II、8A-III）である。コルマンの上顎面示数は上顎面短型1例（8A-II）である。小縫合骨は2例（8A-I、8A-III）でみられる。
- 8) 第8号横穴上層出土人骨の大腿骨上骨体断面示数は超広型（8A-I）または広型（8A-II、8A-III）、胫示数は平胫（8A-I）または厚胫（8A-II、8A-III）である。
- 9) 第8号横穴上層人男性の身長は大腿骨最大長より162.5cm（8A-I）、155.6cm（8A-II）と推定される。
- 10) 第8号横穴下層出土人骨の頭蓋上面觀は卵円形（8B-I）または類五角形（8B-605）、頭蓋長幅示数は中頭型（8B-I、8B-605）である。コルマンの上顎面示数は上顎面中型（8B-II、8B-605）である。頭頂間骨は1例（8B-549）、小縫合骨は2例（8B-605、8B-608）でみられる。
- 11) 第8号横穴下層出土人骨の大腿骨上骨体断面示数は超広型（8B-I、8B-II、8B-559、8B-482）または広型（8B-548）、胫示数は中胫（8B-439、8B-409）または厚胫（8B-I、8B-II、8B-454）である。
- 12) 第8号横穴下層人男性の身長は大腿骨最大長より158.4cm（8B-I）、155.2cm（8B-II）である。

#### 参考文献

- 1) 大野 究：脇方横穴群、「富山県埋蔵文化財センター年報・平成元年度」、富山県埋蔵文化財センター、富山、1990予定。
- 2) Martin,R. & Saller,K. :Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1, 2, 429-597, 1005-1477, Gustav Fisher Verlag, Stuttgart, 1957.

- 3) 城一郎：古墳時代日本人人骨の人類学的研究、人類学報 1 : 1 ~ 334, 1938。
- 4) 岡崎卯一：富山市安養坊番神山の横穴墓、「大境」 3 : 1 - 7, 1965。
- 5) 渡 春、西井龍儀：小矢部市のあけぼの 一 桜町横穴古墳、「小矢部市史」市史編さん室、76 - 110, 1971。
- 6) 林 夫門：江道横穴出土人骨と自然遺物、「高岡市江道横穴古墳群調査報告書」高岡市史料編纂委員会、11 - 13, 1957。
- 7) 森沢佐歳、松田健史：藤田薬師横穴墓群の出土人骨について、「藤田薬師中世墓発掘調査報告書」永見市教育委員会、16 - 25, 1985。
- 8) 佐倉 肇、溝口優司：富山県永見市大境洞窟出土人骨について、国立科学博物館専報 19 : 215 - 222, 1986。
- 9) 小片 保、加藤克知、六反田篤：富山県永見市治洞穴から出土した人骨の形質について、人類誌: 97 : 353 - 372, 1989。
- 10) 中山正秀：朝日貝塚人下肢骨ノ人種解剖学的研究・第1編大腿骨ノ研究、金沢医科大学解剖学教室業績 31 : 1 - 112, 1938。
- 11) 斎藤義直：北陸日本人上肢骨ノ人類学的研究、金沢医科大学解剖学教室業績 2 : 95 - 115, 5 : 18 - 84, 7 : 40 - 98, 10 : 1 - 67, 1932。
- 12) 大橋内匠：輻帶骨盤ノ形態学的研究、金沢医科大学解剖学教室業績 25 : 1 - 168, 1937。
- 13) 砂田外治：北陸日本人下肢骨の人類学的研究、金沢医科大学解剖学教室業績 2 : 48 - 57, 3 : 46 - 105, 4 : 24 - 45, 70 - 129, 1931。
- 14) 大槻喜男：北陸日本人頭蓋骨ノ人類学的研究（其ノ七）下顎骨計測、歯牙ニ就テ、十全会雑誌、36 : 230 - 244, 1931。
- 15) 福原達郎訳：歯列の成長、医歯薬出版、東京、1977。
- 16) 杉浦保夫、中沢 修：骨年令—骨格発育のX線診断一、中外医学社、東京、1972。
- 17) 若狭勝太郎：胎児四肢骨の研究、金沢大学医学部解剖学教室業績 48 : 51 - 124, 1953。
- 18) 加藤克知：四肢長骨の長さと太さによる性別判定、長大医短紀要 1 : 111 - 117, 1987。
- 19) 平本嘉助：縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化、人類誌、80 : 221 - 236, 1972。

## 第5章 まとめ

### 第1節 脇方横穴群発掘調査のまとめ

今回は、第3・4・8号の3基の横穴の調査をおこなった。

このうち第3・4号横穴は再調査であり、前回の調査後埋め戻されていた人骨を改めて採集し、遺構の実測をおこなった。

この結果、第3号横穴では青年男性骨1個体分が確認できた。また玄室の構造は隅丸方形ドーム型であり、排水施設は確認されなかった。

第4号横穴では、老年男性骨1・熟年女性骨1・壮年男性骨1・壮年女性骨1・性別不明青年骨1・少年骨1・幼年骨2個体の、最小限8個体分の人骨が確認できた。また玄室の構造は方形アーチ型であり、玄室周囲に排水溝が作られていた。

一方第8号横穴の玄室の構造は、隅丸方形ドーム型であり、排水施設は確認されなかった。また人骨は上下2層に分かれて合計15体確認できた。

上層の人骨は、青年男性骨1・壮年男性骨1・性別不明少年骨1・性別不明幼年骨3の計6個体である。この人骨は同じ層から土師器・銅鏡が出土しており、中世のものと考えられる。その時期は14世紀前半頃であろう。これらの人骨は、幼年骨を除いて生理的体位をほぼ保っていること、玄室内でも漢道に近い部分に集中することから、ほぼ同時期に投げ込むように埋葬されたものと考える。土師器と銅鏡はこのときに副葬されたものであろう。特に銅鏡6~8は頭骸骨の下から出土しており、死者の口中に含ませた可能性がある。

水見市内では、近年中世墓の例が増加している。しかしそのほとんどは火葬例であり、土葬等火葬以外の例はほとんどない。昭和55年工事中に発見された長坂ソウト遺跡<sup>往1</sup>は、市内中世土葬墓の唯一明らかな例であるが、ここでは死者に珠洲鑿をかぶせ、地下40~50cmに埋めたものであった。これに対して脇方第8号横穴では、死者の上に石をのせた可能性はあるものの、土をかぶせた形跡はほとんどない。本例は土葬というよりも、風葬あるいは遺棄されたものと考えたい。

下層の人骨は、老年男性骨2・壮年男性骨1・壮年又は青年男性骨1・壮年又は青年女性骨1・性別不明少年骨1・乳幼児骨3の計9個体である。

出土状況を観察すると、玄室中央に老年男性が1体、玄室南側に壮年男性が1体、残りが玄室北側に擾乱を受けた状態で出土している。また玄室中央の人骨がほぼ生理的体位を保っているのに対し、南側の人骨はやや擾乱された状態である。この出土状況は、順次埋葬された遺体をある時点で北側にかたづけ、次いで埋葬した壮年男性（8B-II）を南側に押し込み、最後に老年男性（8B-I）を埋葬したという追葬の様子を示していよう。

このように、追葬の時点で玄室にあふれた人骨を押し込み、さらにかたづける例は、高岡市頭川城ヶ平横穴群<sup>往2</sup>でも確認されている。したがって、脇方第8号横穴下層の人骨は、年代を示

す遺物の出土がなかったものの、ほぼ床面直上から出土したことと合わせて、古墳時代の横穴  
築造から順次埋葬されたものであると考えたい。

また玄室西南の石22は、ほぼ四角く面取りされており、当初の閉塞石の一部と思われる。石  
23も閉塞石か。玄室東南の石24は性格不明である。いずれも横穴と同じシルト質の石である。

## 第2節 脇方横穴群の推移

横穴群内の個々の横穴の立地・構造は、単に墓域・墓制の変遷を示すだけでなく、築造時に  
おける被葬者集団の意識を反映しているため、その社会構造の変遷を解明する上で、重要な手  
がかりを示しているといえよう。脇方横穴群について検討してみる。

詳細不明の第7号横穴を除いた7基の横穴を、その立地・構造をもとに分類してみた。

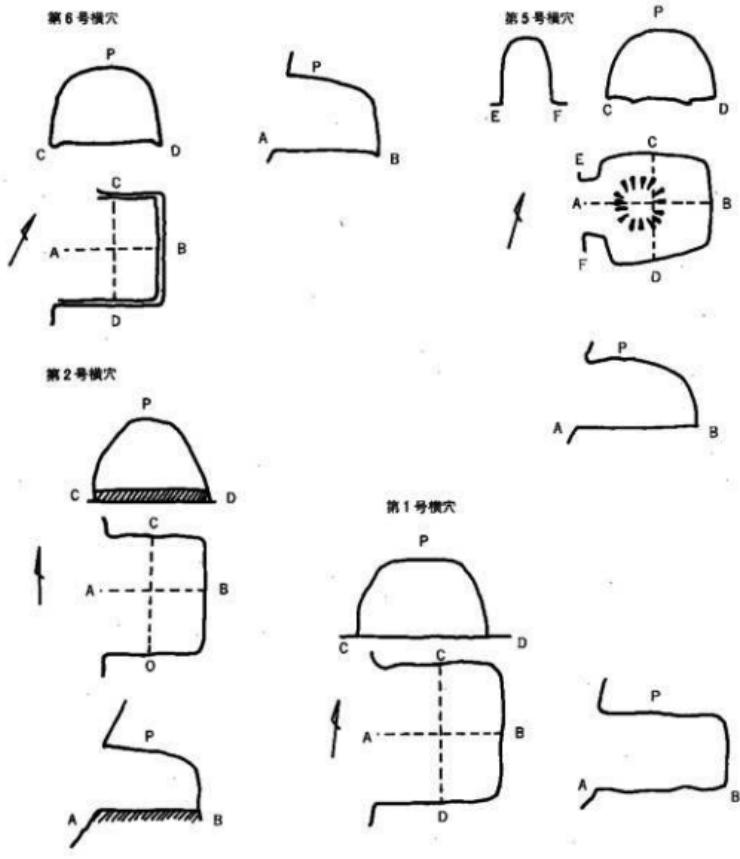
まず立地では、上位に位置する1・2・3・8号横穴と、下位に位置する4・5・6号横穴  
の二群に分かれる。上位の横穴は標高約13.4~14.5mの地点に、ほぼ一列に築造されているの  
に対し、下位の横穴は上位横穴北側に一段低い標高約13.0mの地点に第4号横穴が、そこから  
北西約30mの標高約12.0mの地点に第5・6号横穴が並んで築造されている。下位の横穴がや  
や離れて築造されているものの、上位の横穴が一列に並んでいる様は、横穴築造にあたって上  
位と下位の区別が明確につけられていたためと考えたい。

次に構造では、まず立面形において、アーチ型の1・2・4・6号横穴と、ドーム型の4・  
5・6号横穴の二群に分かれる。また玄室床面積では、5.1~5.3m<sup>2</sup>と大型の1・4・8号横穴  
と、3.8~4.4m<sup>2</sup>と小型の2・3・5・6号横穴の二群に分かれる。こうした構造の違いも、被  
葬者集団の横穴築造時における意識の違いを反映しているといえよう。

ではこれらの分類の時間関係はどうであろうか。

まず出土遺物を検討してみる(第22図)。1は手づくね成形の中世土器皿である。口径11.5  
cm、器高2.4cmを測る。口縁外側に一段横ナデを施し、端部はつまみ上げる。2・3は須恵器杯  
とその蓋である。2は口径9.6cm、器高3.2cmを測り、宝珠つまみをつけ、内面にかえりのある  
蓋である。3は口径8.8cm、器高3.6cmを測る杯である。これらは最近の北陸の土器編年である  
田嶋編年にあてはめればII<sup>4</sup>期に相当し、7世紀第3四半期頃にあたる。4の平瓶は口径8.0cm、  
器高14.4cm、胴部最大径17.6cmを測る。口縁に段は無く、頸部は体部中心よりややずれた位置  
に付き、把手は無い。肩部は丸く、底部はやや平らであり、カキ目調整を施す。また器体上面  
に自然釉がかかる。これらの特徴から2・3の蓋杯とほぼ同じ時期のものとしてよいであろう。  
2・3は大型の第4号横穴、4は小型の第6号横穴からの出土であり、これは大型の横穴と小  
型の横穴が、ほぼ並行して使用されていたことを示している。

さらに横穴の現状から、羨道部及び一部玄室まで崩壊している横穴と、玄室・羨道の床面が  
遺存している横穴の二群に分類できよう。これら二種の横穴が同一崖面に並んで所在する状態  
は、ある時点で何らかの理由により横穴群一帯が崩壊したことにより、既存の横穴が使用不可  
能になったため、新たな横穴を築造したものと考えたい。ここで注目すべき点は、前者の崩壊

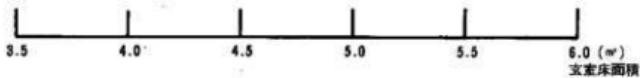


■ アーチ型  
● ドーム型

2号 ■ 3号 ● 8号 ● 1号 ■  
5号 ● 6号 ■ 4号 ■

—— 上位横穴

—— 下位横穴



第37図 施方横穴群各横穴の構造 (実測図は、註14文献から作製)

横穴がいずれもアーチ型であるのに対し、後者がいずれもドーム型であることである。このことは、脇方横穴群では当初アーチ型の横穴のみが採用され、それらが崩壊後、新たな横穴の築造にあたって今度はドーム型の横穴が採用されたことを示すといえよう。

また調査した3基の横穴についてのみではあるが、アーチ型の第4号横穴では工具痕が確認できなかったのに対し、ドーム型の第3・8号横穴で同種の工具痕が確認できたことも、横穴築造工程最終段階における仕上げの仕方の違いとして注目できよう。<sup>注5</sup>

また、出土遺物を検討した第4・6号横穴はアーチ型であることから、遺跡一帯の崩壊は、その須恵器の時期以後の、7世紀第3四半期末から第4四半期頃のことと推定する。

したがって、ドーム型横穴の採用は、7世紀第4四半期頃と考えられ、第8号横穴の人骨出土状況・年令から、脇方横穴群における追葬の終焉は7世紀一杯、遅くとも8世紀初頭頃までと推測したい。

一方第4号横穴の造営期間は、出土の人骨の様相から半世紀程度と考えておきたい。したがって本横穴群の造営開始は、7世紀第1四半期頃と仮定する。

以上、脇方横穴群は、7世紀第1四半期頃に造営が始まったであろう。その被葬者集団には上位下位の二つの系統があり、さらにそれぞれが大型・小型の二種類の横穴に埋葬された。この秩序は横穴使用の間、厳格に守られた。また当初はアーチ型横穴のみが採用されたが、7世紀第3四半期末から第4四半期頃の遺跡一帯崩壊後はこの規制が薄れ、逆にドーム型の横穴のみが採用された。その後追葬は遅くとも8世紀初頭頃まで続き、横穴群は終焉を迎えた。

### 第3節 氷見地域の古墳時代から古代前半期の様相

脇方横穴群の被葬者像を考察するために、氷見地域の該期の様相を大まかにとらえておきたい。<sup>注6</sup>

氷見地域では、近年丘陵地において古墳群の発見例が増えている。現在までに明らかなその数は、24群131基にのぼる。この数は今後さらに増えるであろう。

氷見地域はこれまで群集墳よりも横穴群が盛行した地域として認識されてきた。しかし、近年の古墳群の増加により、氷見地域の今までの認識は改める時期にきていると思う。こうした意味も含めて、ここでは氷見地域の古墳時代から古代前半期について、古墳・横穴・集落・生産・信仰の五つの要素に分けて、各水系ごとにまとめてみた（第37図）。<sup>注7</sup>

氷見地域で特に注目できるのは、上庄川流域の地域であろう。この地域の集落の様相は不明であるが、古墳の数では他の地域を抜きんでている。またその分布範囲も、海岸に近い丘陵から上庄川を約12kmさかのぼった久目・触坂地区まで、川流域の平野沿いの丘陵ほとんどに及んでいる。またその内容も、朝日渕山1号墳・中村天場山古墳の2基の前方後方墳が築かれている一方、泉1号墳は径約46mを測り、円墳としては立山町の稚児塚古墳と並んで県内最大級の大きさである。また6世紀前半の朝日長山古墳からは、県内では2例しかない円筒埴輪のほか、武具・馬具・装身具等の優秀な遺物が出土している。そしてこうした背景をもとに、8世紀初

氷見市内所在古墳(1)

遺跡番号	名 称	立 地	墳 形	規 模(m)	高 さ (m)	備 考
8	宇波古墳	丘陵先端	不明	不明	不明	明治33年、人骨1体・直刀2?・須恵器(提瓶1・甌1)出土。
21	指崎向山古墳群					
1	丘陵	円墳	径15	1.0		
2	"	"	径8	0.5		
3	"	"	径10	0.5		
4	"	"	径9	0.5		
5	"	"	径10	1.0		
6	"	"	径10	1.0		
7	"	"	径10	1.0		
8	"	"	径8	0.5		
9	"	"	径9	1.0		
10	"	"	径10	不明		
11	"	"	径10	不明		
12	"	"	径10	不明		
13	"	"	径15	2.0	昭和24年、直刀1・管玉9・須恵器(甌1・甕破片)出土。磚床。	
37	中村天場山古墳	独立丘陵	前方後圓墳	全長33.5	2.0	
42	泉古墳群					
1	丘陵尾根	円墳	径46	5.0	二段築成か。	
2	"	"	径30	2.0		
3	"	"	径11	2.0	方墳の可能性あり。	
4	"	方墳	15.5×?	1.0		
5	"	"	11×?	1.3		
6	"	"	7×8.5	不明		
7	丘陵	"	10×?	不明	通称鶴塚。	
8	"	円墳?	不明	不明	ほぼ消滅。	
9	"	方墳	11.5×12.5	2.0	通称鶴塚。大正年間、切子玉1・管玉2・小玉5出土。	
10	"	不明	不明	不明		
11	"	不明	不明	不明		
12	丘陵尾根	円墳	径12.5	1.0	一部消滅。	
13	"	"	径12	1.0		
14	"	"	径9.5	1.0	須恵器破片表採。	
15	"	"	径11	1.0	須恵器破片表採。	
16	丘陵裾	不明	不明	不明		

水見市内所在古墳(2)

遺跡番号	名 称	立 地	墳 形	規模(m)	高さ(m)	備 考
	17	丘陵裾	円墳	径15	1.5	通称鶴塚。大正11年、人骨1・勾玉數個・小玉30・直刀2・土器3出土。
	18	"	"	不明	不明	
	19	丘陵尾根	"	不明	不明	
	20	"	"	不明	不明	
45	小久米A古墳群 1 2	丘陵	不明 円墳か	不明 不明	不明 不明	大正4年頃、直刀1出土。
55	朝日長山古墳	丘陵尾根	前方後円墳か	全長30?	3.0	消滅。昭和27・47年発掘調査。 直刀5・短剣1・鉄鉢1・鐵鎌約50・胡祿金具・冠帽片・杏葉2・鞍1・管玉2・丸玉6・須恵器(杯蓋5・杯7・台付盞・高杯・甕・器台・壺蓋・短頸壺各1)・土師器(壺2・盤5・黒色杯6)・円筒埴輪が出土。竪穴系横口式石室か。石室内赤彩・礫床。
73	惣領古墳	独立丘陵	円墳か	30×15	5.0	大正末年遺物出土、昭和38年 発掘調査。直刀1・刀子3・鐵鎌・ 管玉1・小玉2・須恵器(提瓶 1・高杯1)が出土。礫床。
90	中村栗屋古墳群 1 2 3 4 5 6	丘陵	円墳	径27~33 径10 径10 径10 径10 径10	3.0 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5	昭和41年、6号墳の下の斜面 で子持勾玉採集(谷屋B遺跡)。
98	堀田ナンマイダ 松古墳	丘陵	円墳	径21	3.2	三段築成。中世墓の可能性あり。
112	熊野神社古墳群 1 2	丘陵尾根	円墳 "	不明 不明	不明 不明	中世墓の可能性あり。

氷見市内所在古墳(3)

遺跡番号	名 称	立 地	墳 形	規模(m)	高さ(m)	備 考
134	朝日渴山古墳群					
	1	丘陵尾根	前方後方 方墳	全長36 9.0×9.0	2.0 1.0	
	2	"				
135	臨方十三塚古墳群					
	1	丘陵	円墳	径15	2.5	
	2	"	"	径12	1.0	
	3	"	"	径3	0.5	
143	光西寺山古墳群					
	1	丘陵	円墳	径14	2.0	
	2	"	"	径7	0.5	
	3	"	"	径7.8	1.0	
	4	"	"	径14.5	2.0	
	5	"	"	径17.5	不明	上部削平。
	6	"	"	径11~14	1.0	
	7	"	"	径17~20	3.0	前方後円墳か(全長37m)。
	8	"	"	径10	1.5	
	9	"	"	径9	2.0	
	10	"	"	径10	1.5	
	11	"	"	径12	2.0	一部消滅。
149	堂谷山古墳	丘陵	円墳	径30	3.0	
150	加納姫子山古墳群					
	1	丘陵尾根	円墳	径30	4.0	
	2	"	"	径10	1.0	
	3	"	"	径30	3.5	
	4	"	"	径10	1.0	前方後円墳か(全長20m)。
	5	"	"	径10	1.0	前方後円墳か(全長20m)。
164	速川神社古墳群					
	1	丘陵尾根	円墳	径24	3.0	
	2	"	"	径8	0.6	
	3	"	"	径13	1.3	
	4	"	"	径10	1.0	
	5	"	方墳	11×11	2.0	
	6	"	"	16×11	1.5	
	7	"	"	12×11	2.0	
	8	"	"	14×11	1.5	

永見市内所在古墳(4)

遺跡番号	名 称	立 地	墳 形	規模(m)	高さ(m)	備 考
165	早借古墳群					
	1	丘陵尾根	方墳	8×7	0.5	
	2	"	"	11×12	1.0	
	3	"	"	11×12	1.2	
	4	"	"	6×6	0.5	
	5	"	"	10×5.5	1.2	
	6	"	"	6×6	0.7	一部削平。
	7	"	"	8.5×11	1.0	
	8	"	"	6×?	0.6	一部消滅。
	9	"	円墳	径17	2.0	
	10	"	"	径10	1.4	
	11	"	"	径11.5	1.4	
171	堀田ニキ塚山古墳群					
	1	丘陵	方墳か	不明	不明	消滅。
	2	"	方墳	20×20	不明	消滅。
	3	"	円墳	径22	5.0	二段築成か。
	4	"	"	径8	0.5	一部消滅。
172	新保円山古墳群					
	1	丘陵先端	方墳	21×16	2.0	墳丘南側約1/2を東西方向の道で分断。若干の盛土がみられる。土師器片採集。
	2	丘陵	円墳	径6.5	0.8	
	3	"	"	径22~23.5	3.0	丘尾切斷。
	4	丘陵尾根	"	径16	3.0	1/2消滅。
	5	"	方墳	11×?	1.2	一部消滅。
	6	"	"	6×?	0.8	一部消滅。
	7	"	段状墓	11×12	2.0	
	8	"	"	9.5×15	2.0	
	9	"	方墳	12×16	2.0	
	10	"	"	6×12	1.0	
	11	"	"	18.5×20	2.0	
	12	丘陵裾	円墳	径18~19	2.0	
	13	"	"	径10	0.8	
173	小久米B古墳群					
	1	丘陵	円墳	径14	2.0	
	2	"	"	径5	0.6	
	3	"	"	径7~8	1.0	

氷見市内所在古墳(5)

遺跡番号	名 称	立 地	墳 形	規模(m)	高さ(m)	備 考	
	4 5 6 7 8 9	丘陵 〃 〃 〃 〃 丘陵尾根	円墳 〃 〃 〃 〃 円墳か	径7~8 径12 径6 径6 径6 不明	1.0 1.5 1.0 1.0 1.0 不明		
174	田江古墳群	1 2 3 4 5	丘陵尾根 〃 〃 〃 〃	円墳 〃 〃 〃 〃	径7 径5 径8 径5 径6	1.5 0.5 1.0 0.6 0.6	一部削平。
175	日名山古墳群	1 2 3	丘陵尾根 〃 〃	円墳 〃 〃	径20 径10 径11~13	2.5 0.8 2.0	前方後円墳か(全長44m)。
180	久目梨谷古墳群	1 2 3 4 5 6 7	丘陵 〃 〃 〃 〃 〃 〃	円墳 〃 〃 方墳 円墳 〃 〃 〃	径10 径8 径11.5 11.5×10.0 径8 径7 径15	2.0 0.5 1.0 1.5 1.0 0.5 3.0	
216	柿谷土谷山古墳群	1	丘陵	円墳	径20	不明	消滅。通称丸山古墳。明治40年、重刀2・鉄鎌數十・土器片多数出土。周辺にはこの他にも数基の古墳があったらしい。

頭には小窪庵寺とその瓦の一部を生産した小窪瓦窯が築かれた。<sup>注10</sup>

次に十三谷地域は、繩文海進以後潟湖が形成されたことで有名であるが、遺跡の分布等から古墳時代後期には布施の丸山周辺まで陸地化していたと考えられ、南部の惣領・神代・堀田周辺に古墳群が分布している。また6世紀前葉には朝日長山古墳出土須恵器よりやや先行する時期の圓カンデ窯が操業され、上庄川流域の地域との関連がうかがえる。<sup>注11</sup><sup>注12</sup>

上庄川・十三谷の両地域は比較的平野が多く、氷見南部地域の集団は農耕を基盤として、古墳時代を通して安定した勢力を保っていたといえよう。またこの地域には住居址を確認した小久米A遺跡や、矢ノ方一丁目遺跡等が所在することから、これらの集団の系譜は弥生時代後期にまで遡る可能性がある。<sup>注13</sup><sup>注14</sup>

西条地区では、古墳時代前期末から後期にかけて連縄と造営された桜谷古墳群が所在する。<sup>注15</sup>この地域は古墳時代には平野が少なく、海人集団の墓地ではないかとする説がある。しかし集落とともにこの地域の詳細はいまのところ不明である。<sup>注16</sup>

このような氷見南部地域に対して、北部地域は様相を異にするようである。

氷見北部の灘浦・八代谷・余川谷の各地域では、古墳はあまり確認されず、様相の判明している古墳も、6世紀代のものである。特に余川川流域の地域は、6世紀の遺物が若干確認されるものの本格的な開発は古代に入ってからである。<sup>注17</sup>

残りの灘浦・八代谷地域では6世紀に入って活動が目立ってくる。特に注目できることは生産関連の遺物である。九殿浜遺跡では製塙活動が推定され、萩田薬師横穴群からは鉄滓が出土している。<sup>注18</sup><sup>注19</sup>

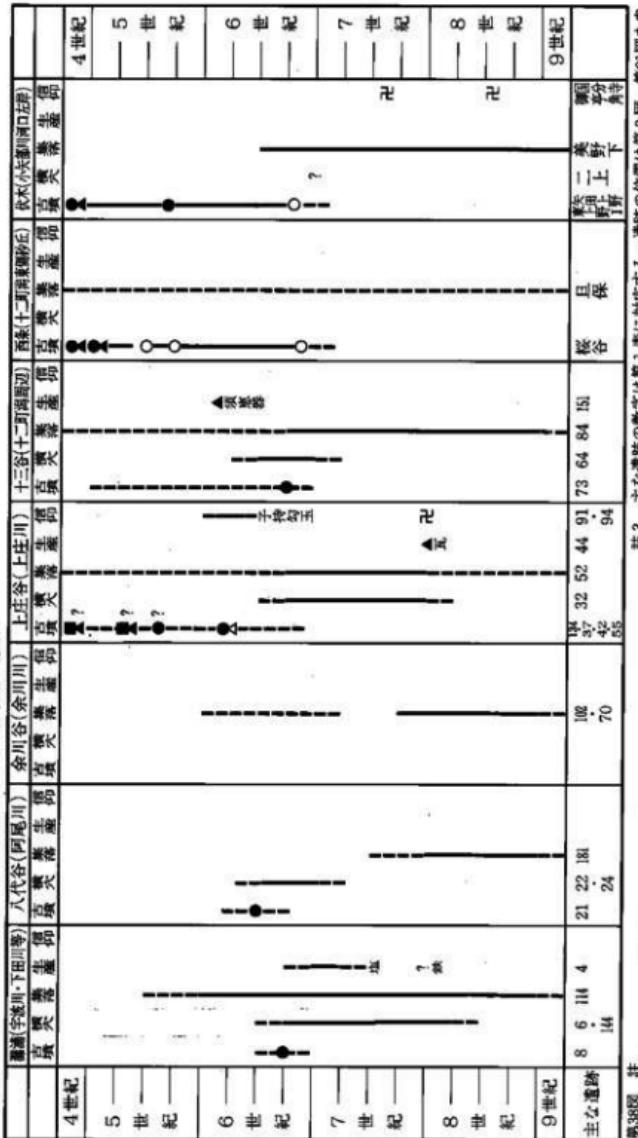
この地域は平野が少なく、農耕だけでは南部地域に遅れをとっていたと思われる。こうした集団が古墳時代後期に力をつけた理由として、塩や鉄の生産に携わった可能性があることは重要なことであろう。

そしてその原因として、例えば製塙についていえば、遺跡の分布により、能登地域からの影響が想定できるように、外來の勢力からの影響が考えられる。この問題は、須恵器の产地推定等を含めて、検討していきたい。<sup>注20</sup>

脇方横穴群前方の平野西南端に宇波古墳が所在する。宇波古墳は神社改築工事中の明治33年に、本殿から石室が現れ、人骨1体・須恵器龜・須恵器提瓶・鉄刀が出土した。墳形は不明であるが、現状からは丘陵末端の尾根上に、地形を利用して築造された古墳と考える。<sup>注21</sup>

出土遺物のうち、須恵器龜は口径13.3cm、器高16.8cm、体部最大径9.4cm、孔径1.3~1.4cmを測る。胎土は極細の白砂粒を多く含み、若干の石英が混ざる。焼成はやや甘く、色調は暗青灰色を呈す。体部下半を除いて回転ナデを施し、体部下半は不定方向のヘラケズリとナデを施す。頸部の接合は乱雜であり、底部内面には指頭圧痕が残る。口縁端部で面をとり、口縁部下の段は甘い。沈線も全て甘い。装飾は頸部上半に七条の櫛目波状文を乱雜に施し、体部中央に櫛目押圧文を施す。須恵器提瓶は口径8.6cm、器高19.0cmを測り、胎土は白砂粒を多く含む。

第38図 水系ごとにみた水見地城古墳時代から古代前半期の様相



注1 4世紀については時期区分できる資料が少ないので、一括して取り上げた。

注2 古墳については、ある程度輪郭の確定できるものを地形を表す印で示した。なお印は現丘規模を表してはいない。また○印は複形の判明しない古墳である。

注3 主な遺跡の数字は第1表に対応する。遺跡の位置は第3図~第21図を参考にしたい。

注4 富山市の遺跡については次の文献を参考にした。

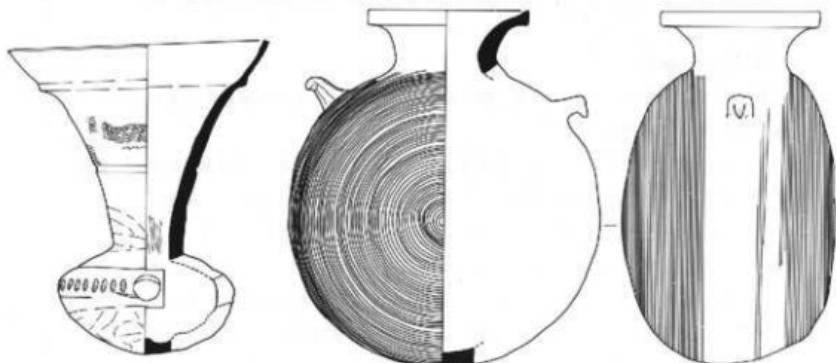
- 富山県教育委員会「富山県高岡市深谷古墳群調査報告書II」 1983年
- 北陸古瓦研究会「北陸の古代寺院」。社務所 1987年
- 西山丘陵埋蔵文化財分布調査報告書IV」 1987年
- 高岡市教育委員会「西山丘陵埋蔵文化財分布調査報告書V」 1988年
- 高岡市教育委員会「西山丘陵埋蔵文化財分布調査報告書VI」 1989年

焼成は普通であり、色調は灰色である。体部はカキ目調整を施し、その他は回転ナデである。口頭部は外反し、把手はカギ状である。体部一部に灰色の自然釉が付着する。両者とも在地産を思わせる製品であり、その特徴から6世紀中葉～後葉のものであろう。

のことから宇波古墳被葬者の埋葬後1～2世代で、脇方横穴群の造営が始まったと考えられる。それでは脇方横穴群の被葬者は、宇波古墳被葬者とつながるのであろうか。

最近確認した古墳群に、脇方十三塚古墳群がある。この古墳群は脇方横穴群の所在する丘陵上に立地しており、現在円墳3基が確認できる。付近の地形や「十三塚」<sup>注22</sup>という地名からして、この他にも数基の古墳が所在した可能性がある。いまのところ遺物の採集はなく、古墳群の年代は特定できない。したがって脇方十三塚古墳群の年代等の評価によって、同じ丘陵に立地する脇方横穴群の被葬者の評価も異なってくることになる。この問題は今後の課題である。また、永見北部地域の重要な生活基盤のひとつとして想定できる、漁撈活動の解明も、重要な課題であろう。いずれにせよ脇方横穴群は、塩生産等を取り入れることにより徐々に勢力をつけた灘浦地域の集団の、有力家族の墓地といえよう。

古墳時代の永見地域の集団が取り入れた須恵器・塩生産の技術は、そのまま古代へは引き継がれなかった。射水郡内の須恵器生産は、すでに7世紀初頭には下条川左岸丘陵で集中的に開始され、7世紀中葉にはそこで生産された瓦が、小矢部川下流左岸の伏木台地に所在する御亭<sup>注23</sup>角鹿寺に供給されるに至る。射水郡では二上山の西北を占める永見地域よりも、東南側の地域がクローズアップされるのである。この動きは志雄越えに越中に至るルートよりも、俱利伽羅越えに越中に至るルートの重視、すなわち五畿七道の整備につながるものであろう。永見地域の古代の様相は大方がまだ不明であるが、北陸道の主ルートからはずれてしまった古墳時代以来の永見地域の集団が、律令国家への転換という状況のもとで、どのような対応をしていった



第39図 宇波古墳出土遺物実測図(1/3)

のか興味深いところである。脇方横穴群や加納横穴群が<sup>注25</sup>8世紀初頭近くまで、萩田薬師横穴群<sup>注26</sup>が8世紀前半まで造営されていたことは、伏木地域に対して水見地域の古代への移行が、複雑な様相のもとに成されたことを物語っている。

しかし水見地域が北陸道からはずれたことは、少なくとも、6世紀前葉に須恵器窯の造営された十三谷に美しい自然を残すことになり、それゆえに8世紀中葉に越中国守として赴任した大伴家持がたびたび遊覧し、その風景を歌に遺すことになったのではないだろうか。

北陸道の問題は、今日の水見市にも通じる問題である。

#### 註

- 1 水見市教育委員会 1984 「富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書」
- 2 高岡市教育委員会 1983 「富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群第I次緊急発掘調査概要」  
高岡市教育委員会 1984 「富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群第II次発掘調査報告」
- 3 横穴の立地・構造から被葬者集団の性格を検討した例として、次の研究がある。  
藤田富士夫 1987 「第四章 古墳時代」『富山市史』上巻
- 4 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 5 第3・8号横穴の工具痕は、横穴築造の最後の仕上げの様子を示している。すなわち曲線の刃をしたチョウナ状工具を頭上から真っすぐに振り降ろし、横穴の天井頂部から縦位に整形をおこなったのである。
- 6 ここでいう水見地域とは、現在の水見市に高岡市太田地区（旧水見郡太田村）を加えた範囲であり、二上山丘陵より北西にあたる地域のことである。
- 7 この成果は水見市教委・市立博物館による調査の他、西井龍儀氏の踏査に負うところが大きい。
- 8 例えば次の論考がある。  
駒見和夫・佳容子 1988 「越の横穴墓とその背景」『玉口時雄先生古希記念考古学論文集 古代集落の諸問題』
- 9 上庄川上流の様相については、来年夏発刊予定の『久目村史』で紹介する予定である。
- 10 西井龍儀 1987 「小窪瓦窯跡」「小窪庵寺」「北陸の古代寺院」 桂書房
- 11 西井龍儀・林寺敬洲・大野 実 1988 「水見市園カンデ窯」「大境」第12号
- 12 註11文献。
- 13 水見市教育委員会 1985 「富山県水見市小久米A遺跡発掘調査報告書」
- 14 水見高校歴史クラブ 1964 「富山県水見地方考古学遺跡と遺物」  
なお、本遺跡はこれまで矢ノ方一丁田遺跡としてきたが、所在地の小字名は「一丁目」が正しく、本書をもって矢ノ方一丁目遺跡と改める。

- 15 富山県教育委員会 1978 「富山県高岡市桜谷古墳群調査報告書」  
富山県教育委員会 1983 「富山県高岡市桜谷古墳群調査報告書II」  
高岡市教育委員会 1987 「西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報IV」
- 16 藤田富士夫 1983 「日本の古代遺跡13 富山」
- 17 余川流域の遺跡については、水見市立博物館の今年度の年報で紹介する予定である。
- 18 水見市教育委員会 1975 「富山県水見市九殿製塙遺跡調査報告書」
- 19 水見市教育委員会・富山県砂防課 1985 「富山県水見市萩田薬師中世墓発掘調査報告書」
- 20 戸洞幹夫 1983 「能登式製塙土器—型式分類とその変遷—」『北陸の考古学』
- 21 清水一布 1960 「瀧浦誌」  
出土遺物は、所有者である瀧谷久信氏のご好意で今回実測をおこなった。
- 22 神奈川大学日本常民文化研究所の調査によれば、「十三塚」の地名は全国に333ヵ所あり、ほとんどは消滅もしくは伝承のみである。また古墳と認定できる例は22ヵ所である。民俗学でいう「十三塚」は、方形を呈し規模も10m以下のものが多い。したがって脇方例は一応古墳群と考えておきたい。
- 神奈川大学日本常民文化研究所 1984 「十三塚」一現況調査編一 平凡社  
神奈川大学日本常民文化研究所 1985 「十三塚」一実測調査・考察編一 平凡社
- 23 池野正男 1988 「越中における須恵器生産の概要」註4文献所収。
- 24 富山県教育委員会 1983 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第5次発掘調査概要」
- 25 岡本恭一 1984 「加納横穴墓群」『水見市立博物館年報』第2号
- 26 註19文献。

## おわりに

現在知り得るわずかな資料によって、水見地域の古墳時代の様相を考えてみた。今後の資料の蓄積とともに、修正を加えていきたい。

また脇方横穴群と、周辺部及び北陸の横穴との比較検討もできなかった。これも機を改めておこないたい。

また調査そのものについても、木製の足場を組んだため、機械をうまく設置できなかったことや、調査と工事が並行しておこなわれ、騒音と振動に悩まされたことなど、反省点が多い。これらのこととは今後の調査の参考にしていきたい。

「所で御前崎沖に立派な珊瑚礁の島」。これは、立派な珊瑚礁の島か、立派な珊瑚礁を抱く島かの問題である。「所で」、立派な珊瑚礁の島か、立派な珊瑚礁を抱く島かの問題である。「所で」、立派な珊瑚礁の島か、立派な珊瑚礁を抱く島かの問題である。「所で」、立派な珊瑚礁の島か、立派な珊瑚礁を抱く島かの問題である。「所で」、立派な珊瑚礁の島か、立派な珊瑚礁を抱く島かの問題である。「所で」、立派な珊瑚礁の島か、立派な珊瑚礁を抱く島かの問題である。

「所で」、立派な珊瑚礁の島か、立派な珊瑚礁を抱く島かの問題である。「所で」、立派な珊瑚礁の島か、立派な珊瑚礁を抱く島かの問題である。

第8号横穴から宇波・脇方集落を臨む



第8号横穴から宇波・脇方集落を臨む



脇方横穴群遠景（西から）



脇方横穴群近景（西から）



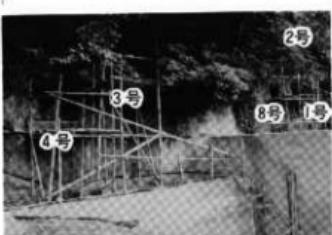
脇方第3号横穴（西から）



脇方第4号横穴（西から）



脇方第8号横穴（西から）



脇方1-4・8号横穴（西から）

図版 2  
第8号横穴出土遺物の状況・調査風景



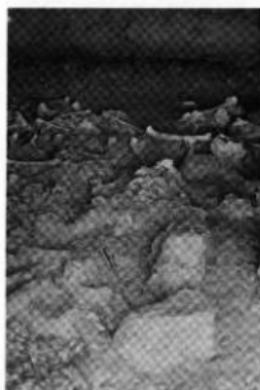
調査前の第8号横穴（西から）



第8号横穴上層の人骨（8A-II）東から



第8号横穴上層の人骨（8A-I）南から



第8号横穴下層の人骨  
出土状況（西から）



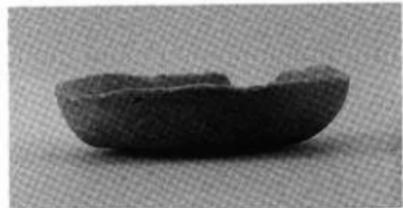
第8号横穴調査風景



調査風景

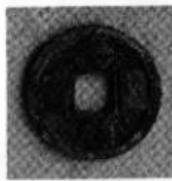
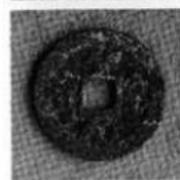
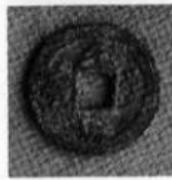
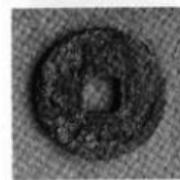
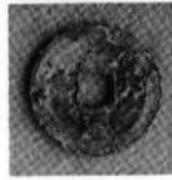


第8号横穴出土陶器



第8号横穴出土土篩器

第8号横穴出土銅錢（番号は第2表に対応）

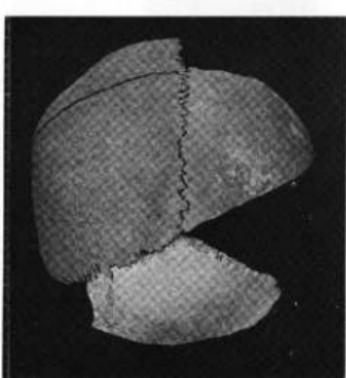
1  
景祐元宝2  
嘉祐通宝3  
聖宋元宝4  
元豐通寶5  
熙寧元宝6  
元祐通寶7  
大觀通寶8  
口宋口寶



第3号横穴 頭蓋上面観



第3号横穴 体肢骨前面観  
(左から上腕骨右、大腿骨右、胫骨左)



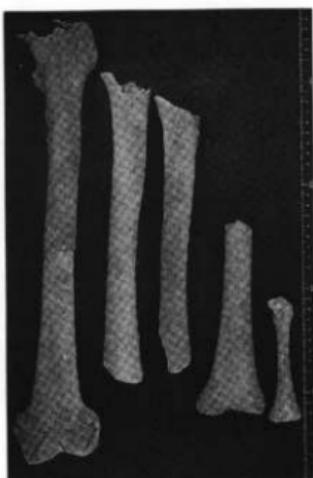
第4号横穴 頭蓋①上面観



第4号横穴 下頬骨側面観  
(上から順に①、②、③)



第4号横穴 上腕骨右左前面観  
(左から順に右①～④、左①～③)



第4号横穴 大腿骨左前面観  
(左から順に①～⑤)



第4号横穴 胫骨左前面観 (左から順に①～④)



8 A - I 頭蓋上面観



8 A - II 頭蓋上面觀



8 A - III 頭蓋上面觀



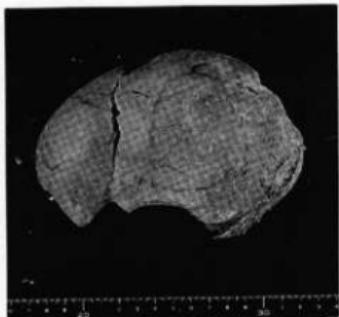
8 A - I 頭蓋側面觀



8 A - II 頭蓋側面觀



8 A - III 頭蓋側面觀



8 A - IV 頭蓋側面觀



8 A - I 頭蓋前面觀



8 A - II 頭蓋前面觀



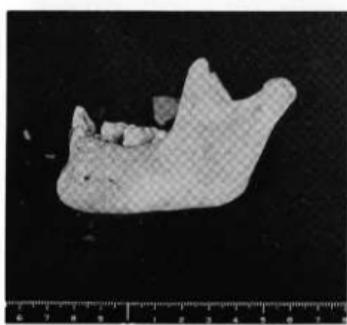
8 A - III頭蓋前面觀



8 A - I 下頷骨左側面觀



8 A - II 下頷骨左側面觀



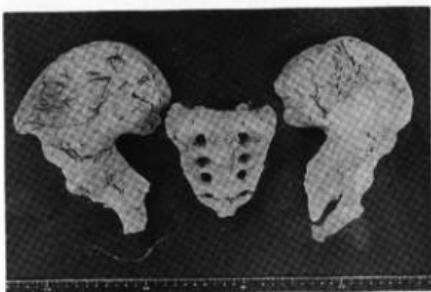
8 A - III 下頷骨左側面觀



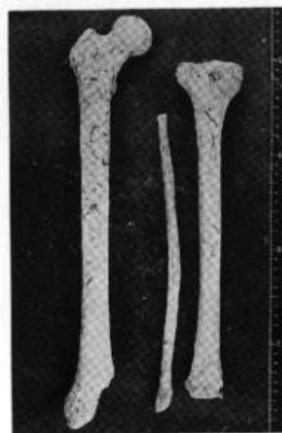
8 A - IV 下頏骨左側面觀



8 A - I 上肢骨右前面觀



8 A - I 骨盤前面觀



8 A - I 下肢骨右前面觀



8 A - III 上肢骨右前面觀



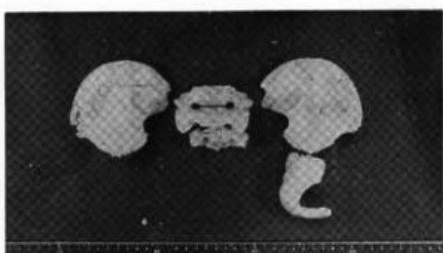
8 A - II 骨盆前面觀



8 A - II 下肢骨右前面觀



8 A - III 上肢骨左右前面觀



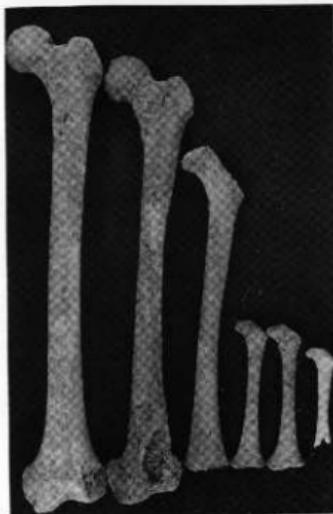
8 A - III骨盤前面觀



8 A - III下肢骨左右前面觀



8 A - I ~ IV上腕骨左前面觀



8 A - I ~ V大腿骨左前面觀



8 A - I ~ V 脊骨左前面觀



8 B - I 頸蓋上面觀



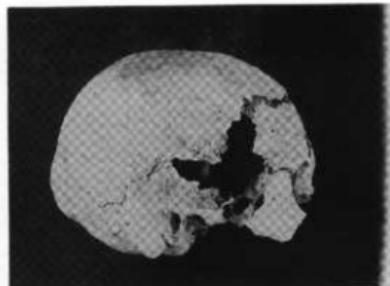
8 B - II 頸蓋上面觀



8 B 頸蓋 (549) 上面觀



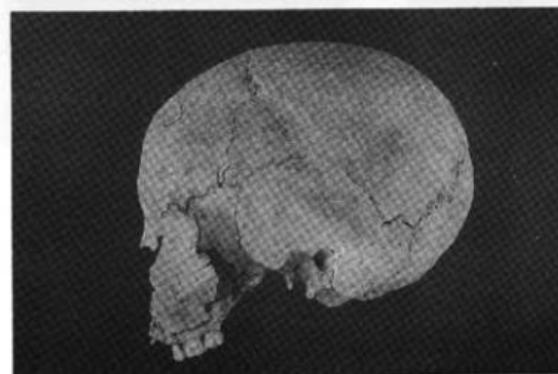
8B 頭蓋〔605〕上面觀



8B - I 頭蓋右側面觀



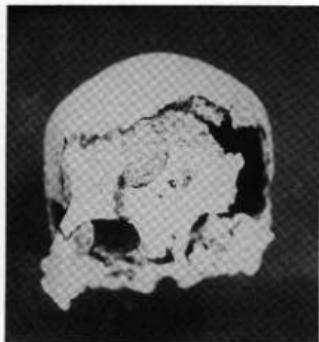
8B - II 頭蓋右側面觀



8B 頭蓋〔549〕  
左側面觀



8B頭蓋〔605〕左側面觀



8B-I頭蓋前面觀



8B-II頭蓋前面觀



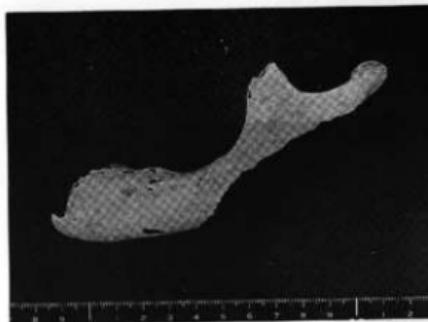
8B頭蓋〔610〕前面觀



8B頭蓋〔549〕前面觀



8B頭蓋〔605〕前面觀



8B-I下頷骨左側面觀



8B-II下頷骨左側面觀



8 B 下顎骨〔437〕左側面觀



8 B 下顎骨〔575〕左側面觀



8 B 下顎骨〔596〕右側面觀



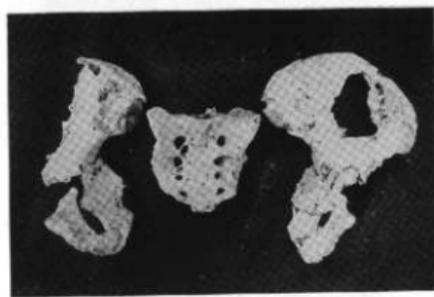
8 B 下顎骨〔515〕左側面觀



8B 下頏骨(605) 左側面觀



8B-I 上肢骨右前面觀



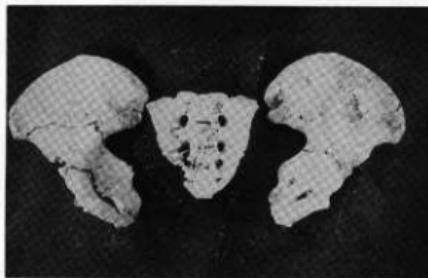
8B-I 骨盤前面觀



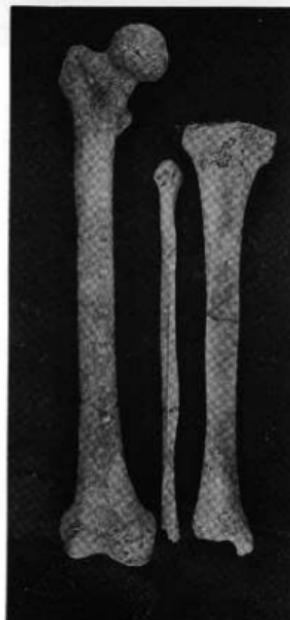
8B-I 下肢骨右前面觀



8 B - II 上肢骨右前面觀



8 B - II 骨盤前面觀



8 B - II 下肢骨右前面觀



8 B 上腕骨左前面觀

(右から順に I [391]、II [320])



8 B 散乱上腕骨左前面観

[左から順に  
460、565、412、400、527]



8 B 散乱寛骨左内面観

(左から順に607、586、449)



8 B 散乱寛骨左内面観

(左から603、588)



8 B 大腿骨左後面観

(左から順に I [382]、II [310])



8 B 散乱大腿骨左側面観  
(左から順に [548、559、482])



8 B 散乱大腿骨左後面観  
(左から順に [591、520、466、425])



8 B 胫骨左側面観  
(左から順に I [359]、II [323])



8 B 散乱胫骨後面観  
(左から順に [439、409、454、602、512、393])

## 氷見市教育委員会発行の埋蔵文化財調査報告書

番号	書名	発行年
1	富山県氷見市朝日長山古墳調査報告書	1973年3月
2	富山県氷見市九殿製塩遺跡調査報告書	1975年3月
3	富山県氷見市堀田大久前遺跡調査概報	1980年3月
4	富山県氷見市鞍川金谷包含地、一の瀬包含地調査概報	1980年10月
5	富山県氷見市長坂貴船遺跡試掘調査報告書	1982年3月
6	富山県氷見市小久米古墳群・小久米A遺跡試掘調査報告書	1984年3月
7	富山県氷見市小久米A遺跡発掘調査報告書	1985年3月
8	富山県氷見市萩田薬師中世墓発掘調査報告書	1985年3月
9	富山県氷見市堀田西谷内遺跡試掘調査報告書	1988年3月

平成元年6月29日 印刷  
平成元年6月30日 発行

### 脇方横穴群

編集・発行 氷見市教育委員会  
 〒935 富山県氷見市本町4-9  
 ☎0766(74)8215  
 印刷 アヤト印刷株式会社